

史料と伊能図

# 伊能忠敬

研究

伊能忠敬銅像特集

二〇〇一年 第二七号



伊能忠敬研究会

## 表紙写真解説

## 北九州市常磐橋脇の伊能測量記念碑と

埋設されるタイムカプセル

二〇〇一年九月二六日に除幕式をおこなった新しい伊能測量記念碑である。

伊能忠敬は九州測量にあたって、文化六（一八〇九）年二月二七日、長府藩がサービスで出してくれた船に乗って、赤間関（下関）から小倉につき、船頭町の宿舎・宮崎良助方に宿泊した。

測量日記によると、ここで越年したあと、文化七年一月一二日に宿舎を出発し、秋月街道三つ辻に印石を据えこんで、ここから九州測量を始めたという。

この記念碑は、九州測量の起点にほぼ近い常磐橋脇の市有地の一等地に設置されたもので、北九州市の二級基準点を兼ねる生きたモニメントである。

御影石などによる直径二、三メートル、高さ五〇センチの円形で、中央に測量基準点の十印が刻まれている。周辺の陶板には測量器具、測量風景などが描かれ、建立趣旨の説明も記されている。

最近の伊能ブームがきっかけとなって、建立がきまり、建設費は測量関係や街づくり関係者が、広く一般に呼びかけて募金により調達された。

後部にはタイムカプセルが埋めこまれており、小学生など数百人がメッセージを持ち込んだ。一〇年後の測量の日にオープンされる。小学生が十年後の自分に宛てたメッセージなど、ほほえましい手紙が、多数うめこまれている。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(渡辺)

## 目次

## 最近の話題

伊能忠敬銅像建立の趣旨と経緯

福岡八幡宮に建立された伊能忠敬像

二〇〇一年度例会および総会報告

例会 鈴木純子氏講演要旨

伊能忠敬銅像建立募金拠出者御芳名

忠敬像建立始末

伊能家に生まれて

## 芳名録より

## 研究ノート・伊能史蹟・報告

『官板実測日本地図』論考

伊能古文書教室 『家牒』(二)

伊能忠敬の歩幅

内弟子・箱田良助の榎本家入籍事情

伊能忠敬の測量道発掘

徳山測量と平山郡蔵の袴紛失事件(二)

忠敬青春の地に記念碑三本

『海上引縄測量の地』記念碑完成

源空寺に忠敬墓は二基あった

ドキュメント・伊能忠敬銅像建立

対馬藩宗家文庫『測量御用記録』(四)

連載・新伊能忠敬物語(二)

朝日新聞記事・新任ご挨拶

忠敬談話室だより

(入会案内・編集後記)

渡辺 一郎

福田 弘行

福田 弘行

白根 貞夫

編集部

伊能 洋

井上 靖子

伊能 陽子

高木崇世

小島 一仁

齊藤 国治

菅波 寛

横川淳一郎

伊藤 栄子

海保 英之

渡部 健三

永野 達代

渡辺 一郎

入江 正利

渡辺 一郎

福田 弘行

編集部

六三

伊能忠敬銅像除幕式。バンドは近くの数矢小学校 音楽クラブ。



## 深川の富岡八幡に伊能忠敬銅像を建立

その趣旨と経緯について

伊能忠敬銅像建立実行委員会事務局長

渡辺 一郎

御承知のように伊能忠敬は日本で始めての実測による日本全図を作った人ですが、伊能忠敬研究会から提案して九八年に江戸東京博物館で「伊能忠敬展」が開催されたのをキッカケに、伊能ウオーク、テレビ、演劇、映画などで、大きく取り上げられるようになりました。

忠敬先生は千葉県佐原で事業に成功したあと江戸に出て、いまの門前仲町一丁目に隠宅を構えていましたが、一七年の間に一〇回の測量に出かけて、日本地図を完成致しました。一〇回の測量旅行のうち、江戸の町を測った第一〇回と、伊豆七島に渡った第九回を除いた第八回までの出発のときは、必ず、旅支度を整えてから、内弟子と下僕をつれてこの富岡八幡宮にお参りし、まっすぐ街道に向かって歩き出しました。

忠敬先生は、迷信や縁起をかつぐ人ではなく、合理性の固まりのような人で、一部ではそこまでやらなくても、といわれていますが、神仏だけは例外でした。旅先でも神社やお寺には丁寧にお参りしています。何故でしょうか。

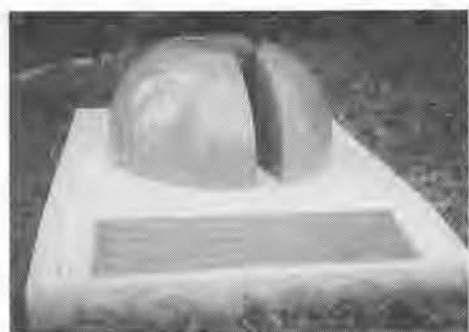
当時では遠い国々を廻って測量の旅を続けていると、水や食物



が変わります、風土病もあったでしょう、また、晴れていれば毎晩星を測って自分の位置を確認していますが、すべての作業は天候に大きく作用されます。忠敬先生は万全の準備を整えて出発していました。それでも、不測の出来事は時々起こっています。それらをもっとも少なくして目的を達成できるよう折ったのではないのでしょうか。

そういう意味で、富岡八幡宮は伊能測量にとってたいへん御縁の深い場所であります。ここに銅像を立て、忠敬先生をより良く理解していただく拠点としたらよいのではないか、という意見が昨年末頃から起こってまいりました。

そして、富岡八幡宮、国土地理院、全国測量設計業協会連合会、日本測量協会、日本土地家屋調査士会連合会、地図測量関係諸団体、日本ウォーキング協会、伊能忠敬研究会、などの御協力により、伊能忠敬銅像建立実行委員会を立ち上げたのが三月一五日で



伊能忠敬銅像脇に設けられた  
三等三角点「富岡八幡宮」  
地球を形どった3つの防護石の中央に  
三等三角点の標柱が立っている。

した。各組織の構成団体および会員有志の浄財拠出および広く一般有志の方々からも基金の拠出をいただいて、約二〇〇〇万円の募金目標を達成し、今日の完成をみたわけであります。

この不景気のなかで、そんな大金がほんとに集まるのかなと心配いたしました。忠敬先生の生涯に深い思いを寄せられる皆様方の絶大な御協力をいただき、心から御礼を申し上げます。

銅像は、背景の高さ二五〇センチの大きな黒御影石に刻まれた伊能忠敬の日本図（伊能小図）をあとに、五五歳の忠敬先生が、杖先方位盤を手に力強く測量への第一歩を踏み出した姿をイメージしております。一般の立像と較べて、たいへんユニークな銅像と考えております。

制作は彫刻家・酒井道久氏、監修は伊能忠敬から七代の子孫で洋画家の伊能洋（ひろし）さんです。銅像の傍らには、経緯度の新地球座標系移行を記念する国家基準点モニメントも設けられました。この基準点はいわゆる三等三角点で、実用することができます。測量基準点であります。

富岡八幡宮の近くには忠敬先生の隠宅跡、地図御用所跡、弟子の間宮林蔵の墓、伊能測量の理解者・松平定信の墓、幕府天文役所跡、忠敬の墓所、など忠敬先生ゆかりの場所が多くあります。また、測量開始のキツカケとなった緯度一分の距離を歩測した道筋も分かっています。この銅像が、忠敬先生の名前を広め、先生を正しく理解して頂くための基点となることを願っております。

（本稿は、伊能忠敬銅像除幕式の冒頭における、本会代表理事で伊能忠敬銅像建立実行委員会事務局長 渡辺 一郎氏の経過報告の原稿に加筆したものである）





富岡八幡宮に建立された伊能忠敬銅像

背後の黒御影石の高さは250cm。彫り込まれた日本全図は英国にあった伊能小図を原図としている。測量へ第1歩を踏み出したところをイメージした。見上げる銅像ではなく、身近な感じをもてる銅像になっている。高さは220cm。想定年齢55歳、大きさは推定身長のおよそ1.3倍である。

# 表面および裏面の碑文

## 表面



寛政十二年（一八〇〇年）  
閏四月十九日（陽暦六月一日）  
五五歳の伊能忠敬は、この地から  
全国測底の旅に出発しました。

伊能測底二〇〇年記念

伊能忠敬像

平成十三年（二〇〇一年）一〇月吉日 建立

## 裏面

### 伊能忠敬銅像建立基金寄付者御芳名

伊能忠敬銅像建立にあたり、左記の方々から伊能測量二〇〇年記念ならびに、それぞれの趣旨を含め多額の御寄付を賜りました。

- （伊能ウオーク記念）（社）日本ウオークキング協会有志、伊能忠敬研究会有志、朝日新聞社、東京都ウオークキング協会有志、月星化成株式会社。
- （創立四〇周年記念）（社）全国測量設計業協会連合会有志。
- （社）日本測量協会、国土地理院職員有志・地図測量関係諸団体會員有志。
- （土地家屋調査士制度制定五〇周年記念）日本土地家屋調査士会連合会有志。
- （読売新聞江東支局開設五〇周年記念）読売新聞社。
- （伊能忠敬ゆかりの地）千葉県佐原市・横芝町・九十九里町。

そのほか、多数の皆様から広く御芳志を賜りました。寄付者御芳名はタイムカプセルに収納して後世に伝えることといたします。

平成十三年（二〇〇一年）一〇月吉日

#### 伊能忠敬銅像建立実行委員会

- |      |                    |       |
|------|--------------------|-------|
| 会長   | （社）日本測量協会会長        | 中川 一郎 |
| 委員   | 富岡八幡宮 宮司           | 富岡 興水 |
| 同    | （社）全国測量設計業協会連合会 会長 | 鈴木 俊之 |
| 同    | 日本土地家屋調査士会連合会 会長   | 西本 孔昭 |
| 同    | （社）日本ウオークキング協会 会長  | 田中 康彦 |
| 同    | 朝日新聞社 代表取締役社長      | 箱島 信一 |
| 同    | （有）劇団俳優座 代表取締役     | 古賀 伸雄 |
| 同    | （財）日本地図センター 理事長    | 大竹 一彦 |
| 同    | 月星化成株式会社 代表取締役社長   | 植松 俊明 |
| 事務局長 | 伊能忠敬研究会 代表理事       | 渡辺 一郎 |

銅像制作者は彫刻家・酒井道久氏である。銅像背面の日本地図は伊能小図によった。

新しい忠敬銅像の特徴は台座が低く、像を下から見上げる形ではなく、見る人の視線の位置にあることである。台座周辺には植栽として「象のひげ」が植え込まれ、この前で記念撮影ができるようになっていて、より親しみが感じられる。なお、現在渡辺代表を中心に作成されている建立趣旨、寄付者芳名などを記した経過報告書は近くに設置されるタイムカプセルに収容される予定である。

あわせて、となりに来年四月から導入される「世界測地系」に従った最初の三角点「富岡八幡宮」が設けられ、同時に除幕された。

これは、今年六月の測地法改正により、従来の東京・麻布台の「日本経緯度原点」を基準とした日本独自の座標系から、世界標準の「世界測地系」に変更になることを記念したものである。

第一号の新基準点は周囲に石で地球を形どったミニメントを置き、銘板には新たな経緯度「北緯三五度四十分十五秒六一、東経百三九度四七分五秒七四」と刻んでいる。これを見下ろす忠敬さんは二百年後の子午線の夢をどのように感じているであろうか。

除幕式当日は好天に恵まれ、千名を超える関係者やウオーカーが集まった。記念ウオーク隊六百余名は、大内さんや、中山翠さんなどを先頭に、東京駅から出発し、八丁堀・地図御用所跡（終焉の地）、黒江町・旧宅跡などゆかりの地を通り富岡八幡宮に到着した。

一時から開始された除幕式は、渡辺実行委員会事務局長の今日に至るまでの経過報告から始まり、神社側の除幕神事がおそかに行なわれた。

ついで、まもなく全国公開になる俳優座の映画「伊能忠敬・子午線の夢」の主演・加藤剛が忠敬に扮し、御用旗を立てた伊能隊を率いて、

お茶役の賀来千香子、伊能秀蔵役の加藤大治郎さんらと登場。会場から盛大な拍手を受けた。前人未到の日本地図完成へ。第二の人生を賭けた伊能忠敬、生涯現役の大ロマンに期待しよう。

除幕は近隣の数矢小学校音楽クラブ児童のファンファーレから始まり、伊能隊、関係者代表と児童代表により、まず伊能銅像の除幕、ついで新基準点が除幕された。一斉にフラッシュがたかれ、秋の日にあざやかなブロンズの銅像が出現した。今日参加した児童たちには、生涯を通じたよい思い出となるにちがいない。前日には国土地理院の堀野測図部長が学校に出向いて忠敬と測量について講演をしている。充分な予備知識を持っていた筈である。

制作者の酒井道久氏、監修者の伊能洋氏をはじめ関係者が紹介されたのち、鏡割り、乾杯で、ビール飲み放題となり、建立を祝って盛り上がった。このあと、記念ウオーク隊は間宮林蔵墓や暦局跡を経て源空寺へと向かった。

午後は富岡八幡宮の結婚式場で、記念パーティーが開催され、関係者。団体代表等八〇名が参加した。研究会からは会費持参で二〇名が出席。席上伊能家八代目・伊能淳氏、神保家・神保弘之氏や、ゆかりの地の代表からお祝いの挨拶があった。

別項のように基金募集には、大勢の会員の皆様にご協力頂き厚くお礼申し上げます。また三〇名を越す除幕式へのご参加にも併せて感謝いたします。

当日夕方の日本テレビ、テレビ朝日では、除幕式模様が放映されていました。

（福田弘行）



除幕の綱を引く加藤剛の伊能忠敬、賀来千香子のお栄と  
秀蔵役の加藤大治郎（加藤剛の息子）



除幕式に集まった多数の参加者。会員・井上靖子さん、  
土肥規男さんの顔が見える。



## 例会及び総会報告

二〇〇一年度第一回例会と二〇〇〇年度総会は八月二六日、東京・千代田区の学士会館で開催された。会員・ゲスト約六〇名が参加し、一月元旦の伊能ウオーク到着以来の顔合せになり、それぞれに会話がはずんだ。例会は定刻二時から開始。

開会前のロビーでは先月報道発表のあった、アメリカにあった二〇六枚の伊能図に関して全国紙、地方紙の記事コピーと、原寸の浜松付近、広島付近のアメリカ大図が公開された。彩色された二枚の伊能図のうち広島のは、伊能洋・浅井ふさ（会員・浅井京子さんのお嬢さん、武蔵野美大・日本画科卒）両氏により米国伊能大図と同レベルに色彩を復元されたもので初公開であった。

### 例会の部・講演

司会 斎藤理事

発表（一）米国にあった伊能大図について 鈴木純子氏

報告内容は別掲の白根貞夫氏リポートをご参照下さい。

発表（二）伊能忠敬顕彰史について

近代日本の黎明に輝く伊能忠敬

— 全国測量開始二百周年によせて —

西川 治氏

今日の伊能忠敬、顕彰史と現代的意義、伊能図の国際的貢献をめぐって

顕彰の歴史 同時代から平成まで各地の記念碑  
県史、市町村史における伊能忠敬記念行事への提言

などにわたり、広く研究の成果を熱心に語られた。おわりにヘルシ  
ンキ大学図書館A・E・ノルデンショルドの地図コレクションの話  
と「地図史では自国の地図は外国人が創った例が多いが、日本の地  
図は日本人が作った」で終えられた。

### 総会の部

渡辺代表

議長・斎藤理事

第一号議案 二〇〇〇年度経過報告と二〇〇一年度以降の方針

一、 第一回全日本歩測大会開催

二、 九十九里、横芝、佐原の一泊見学会

三、 伊能ウオーク完了

四、 富岡八幡宮に伊能忠敬銅像の建立がきまる

五、 会報、かわらばんの編集体制の整備

六、 NHKの伊能測量番組、俳優座「伊能忠敬物語」への協力

第二号議案 二〇〇〇年度収支報告書

第三号議案 役員の改選について

今後の新情勢に対応するため、下記のとおり役員を改選します。

## 新役員

顧問	小島 一仁
顧問	伊能 陽子
顧問	安藤 由紀子
代表理事	渡辺 一郎
理事	伊能 洋
理事	大友 正道 (HP担当)
理事	香取 禧良 (佐原支部長)
理事	斎藤 仁
理事	芳賀 啓
理事	佐久間達夫
理事	福田 弘行 (事務局長・編集長)
監事	清水 靖夫
幹事	石川 精一 (九州支部長)
幹事	原田 照男 (関西支部長)
幹事	加藤 巷児 (事務局担当)
幹事	山本 公之 (編集委員)
幹事	伊藤 栄子 (編集委員)
幹事	前田 幸子 (編集委員)
幹事	坂本 巍 (HP担当・編集委員)

以上について拍手をもって満場一致で承認された。なお、当日現在の会員総数は二二七名、当日出席会員五一名、委任状八七名で、過半数の御承認をいただきました。その後、出席の新役員が紹介された。

## 懇親会

進行 大友理事 斎藤理事 福田理事

金窪会員(元国土地理院長)の乾杯から始まり、遠来の新潟・垣見氏、京都・豊島氏、福岡・野田氏、京都府・松田氏、盛岡・渡部氏から近況など一言があった。伊能ご夫妻をはじめ、会員の木谷さん(日本ウオーキング協会専務理事)から、伊能大図発見報道の楽屋裏、十月に予定される銅像除幕式と記念ウオークのこと、大内伊能ウオーク元本部隊長からは伊能忠敬の映画公開の話などがあり、参加者それぞれに一言ずつ近況報告などスピーチがあった。

なかでも会長夫人は女性の眼で例のアメリカでの伊能図発見の時の模様を話された。旅行最終日に予約なしに議会図書館に行ったが、入館時の出入口警備の模様や、受付のシャロットさんの様子をとても具体的に話され、まさにドキュメントの話だった。渡辺代表がすぐに補足するなど会場はこの話で盛り上がった。

伊能忠敬の日本地図は、時を越えて話題が生まれる。幕末にシーボルトが持ち帰った地図が日本の存在を西洋に伝えたごとく、今度発見された伊能大図も時代のひとこまとなりそうである。流出の経緯や日本での公開などこれからのことになる。

夏のことは云え、日の落ちる頃になり、次回の楽しみを残してお開きになった。ご出席いただいた皆様と幹事をお願いした方に厚くお礼申し上げます。

(福田弘行記)

注 浅井ふさ氏が努力された伊能図着色の話は、共同通信からニュースとして配信され、日経、産経をはじめ、各地の地方紙で大きく取り上げられました。



伊能忠敬研究会例会 鈴木純子氏 講演要旨

## 伊能大図（米国会図書館蔵）について

白根 貞夫

二〇〇一年八月二六日伊能研究会例会において、鈴木純子氏が米国伊能大図の調査報告を発表された。前号で渡辺代表が新聞発表のオリジナルを紹介していたが、調査団の一員として視点を変えた報告だったのでその要旨を紹介する。

一、調査員は渡辺一郎、鈴木純子両氏、地図センター永井信夫氏の3名に現地女子留学生一名の計四名が、二組に分かれて調査した。

二、調査期間は、6月18日（月）～22日（金）まで5日間  
アメリカの資料名は「Japan、北海道―九州、伊能忠敬  
1745―1818」

三、発見された地図の内容

- ①枚数 207枚（新聞発表は206枚だったが、この他に173号があるとのこと。調査のとき見落としらしい。調査員は現物を確認していない。照会中である。）
- ②分類 何枚か纏めて袋に入れてあるが、その表書は次の2種に分けられる。

・第〇〇図、〇〇国という形式のもの

・第〇軍管（3、4、7軍管がある）と記したもの

### ③着色の有無

着色40枚、非着色167枚。前記の第〇軍管と書いてある地図は着色されている。

第7軍管 34枚（地図第1～37号、除12、34、35号）

第3軍管 第132号

第4軍管 第135、139、140号、第137号

（明石・岸和田）

その他 第111号（浜松）第3軍管か？

### ④着色の有無の差

非着色といえ、測量線は赤、水路、海岸線は水色に表現してあるが、山は形を黒線で示してあり、山頂の表示迄してある。

### ⑤軍管図

先述のように、第〇軍管図はすべて着色。

軍管の名称であるが、1～6は鎮台名として、建軍の初めから使用された。ただ、第7軍管（北海道）は、明治12年に制定されたので、本図はそれ以後のものと思われる。但し、地図は古くて、追加記入されたものかも知れない。陸地測量部沿革史によると、明治8年から伊能図の模写にかかるという記事がある。（具体的なことは不明）

## ⑥図式

記載されている図式の中で特徴的な点を幾つか述べる。

- ・北を示す記号はついている。しかし、コンパスローズは充分でない。
- ・人家密集地域——従来の大図は、屋根をかいていたが、今回のもの、黒または茶褐色で長方形の記号である。
- ・方眼のマスメが入っている。
- ・他は概ね同一方法による。

## ⑦具体図

・本会場に浜松（第1—1—1 大井川、浜名湖）と、広島（第167）とが展示されていた。その所見次の通り。

（筆者の感想）

・浜松： 大きさ約2M×1.2M、畳1丈より大きい。現物をスキヤナでデジタル化し、ドットプリンタでアナログ転換して、図に表示したとのこと。

・微細な図形、測量で歩いた足跡、地名（領主など詳細に記載されている。中でもすばらしいこととして、天龍に注目した。東海道を歩いて、道中の天龍川（の状況と海岸線測量時の天龍川河口はあるが、その中間は空白となっている）。

・自分で歩いて計測した部分は表示するが、測らない所は、推定では書かない。技術心が許さない。

・広島： 元図は非着色。

・本図は、1/72,000で表示してあった。

・非着色図と、着色図と展示。着色図は、非着色図に山の

緑を、他の着色図から、色具合を似せて書き、一見すると、着色図のように見まちがえる線が画かれてあった。（渡辺代表曰く「一般人はこちらの方が受けるね」と）

## 四、本図の来歴

日本側としては、明治12年の第7軍管の文字から明治12年以降と考えられるが、米国側は受入れの刻印が何もない。いつ頃はいったか全く不明。

参考ながら、米国の地図収蔵庫は、4000mトラックの内部面積に相当する広さがあり、全世界の地図を集めてあるという。日本とは規模、歴史、格段の差がある。

## 五、発見の意義

この大図の発見により、忠敬日記と対照して、各地区で具体的にどのように歩いて測定したか、解明できてありがたい。町中を、どのように巡り歩いたか、海岸線、測量困難な所、泳いだり、舟を使ったりしたという手法などが判る。全く苦心の作であることが判る。

## 六、今後への期待

ア、全図を原寸大に記録したい。

イ、代表図だけでも借用して日本で展示会をしたい。

ウ、できれば全国を広げ展示し、伊能の偉大さを皆様に訴えたい。

エ、上記の大きな夢、どれだけ実現できるか？

# 伊能忠敬銅像建立募金拠出者御芳名

伊能忠敬研究会 募金総額 一、〇八九、〇〇〇円

【北海道】 斉藤サダ、斉藤重則、杉村久哉、北柴測量設計㈱

【岩手県】 渡部健三

【福島県】 石井千寿子

【茨城県】 野上哲夫、山口善市、窪谷悌二郎、川上 清

大久保雅子

【埼玉県】 加藤巷児、矢能 彰、小沢健一、福田弘行、新沢義博

伊能 淳、八木 勲

【千葉県】 土肥規男、大宮信篤、大友正道、香取孝勇、佐久間達夫

朝岡洋子、江口俊子、海保英之、北田明子、安藤由紀子

成家淑子、本郷晴枝、村上昭三、神保弘之、久保木恒雄

小島一仁、香取嬉良、神保 誠、伊能辰郎、香取秀紀

清水建宇、橋本新治、伊能静光

【東京都】 植田浩一、松浦睦夫、伊藤栄子、神戸信和、渡辺一郎

丹羽菊乃、浅井京子、浅井和春、関根秀次、中川幸子

武田 威、高橋和夫、渡辺禎子、岡部孝子、阿久津綾子

前田幸子、首藤郁夫、中山 翠、長岡道子、荻原哲夫

堀内立三、伊能 洋、伊能陽子、井上靖子

鈴木純子、斉藤 仁、山本公之、大庭 功、清水靖夫

伊能昌子、村田昌夫、辺見蒼子、坪田外喜雄

【神奈川県】

坂本 巍、永野達代、秋間 実、安藤政章、栗田義弘

白根貞夫、島崎恭一、藤岡健夫、大沼 晃、金兵房子

真島 禎、金俊一郎、藤岡洋一

【新潟県】 垣見壮一、熊倉 健

【愛知県】 香取 武

【京都府】 松田昭二、小林 清

【兵庫県】 谷垣忠利、萩原一輝、横川淳一郎、安達正剛、吉井貞俊

【広島県】 菅波 寛

【愛媛県】 管 哲彦

【福岡県】 村井純孝、中富道利、石川清一、河島悦子、熊谷要平

【長崎県】 平川定美、入江正利

【熊本県】 今泉智恵子



青森八幡宮(栗川)



## 忠敬像建立始末

伊能 洋

二年にわたる「伊能ウォーク」の打上げが目前に迫る頃、一息つけるかとホッとしていたところに、渡辺一郎さんの天の声、「伊能測量二百年と伊能ウォーク完歩を記念して、忠敬さんの銅像を立てよう」という話が出てくるんです。場所はやっぱり富岡八幡の境内かな。誰に作ってもらったらいかな。予算はどの位見ればいいんだらうか。伊能さん、ちよつと相談にのつてよ」ということで、いつの間にかプランナーの一人ということになってしまった。

企画力と行動力には定評のある渡辺さんのこと、早速に根回しを始めて、まず富岡八幡に内々の打診をしてお返事を頂き、国土地理院、全国測量設計業協会連合会、日本測量協会、日本土地家屋調査士会連合会、日本ウォーキング協会、朝日新聞社、伊能忠敬研究会などを中心とした約一〇名の委員による実行委員会が立ち上がったのが、三月一五日のことであつた。

これに先だち、三月七日の朝日新聞、一四日の読売新聞などが銅像建立の企画を大きく取り上げた。

私の方では制作者に、芸大出身の中堅作家として活躍している酒井道久君を推薦し、イメージを作るための取材を始めた。酒井君とは以前から内村鑑三のレリーフ、中西悟堂の胸像など何回か企画、制作のチームを組んで信頼出来る仕事振りを承知していた。正月六日には早々と富岡八幡に下見に行き、三月三十一日には酒井君の車に

私も夫婦が同乗して、九十九里の忠敬公園の銅像、佐原の諏訪公園の銅像、旧宅中庭の銅像などを見て廻った。千葉県横芝町には忠敬の父の流れ、神保新さんが居られ、忠敬の面影に似ているともつぱらの評判だったので、お願いしてお宅に伺い、写真を撮らせて頂いた。この写真は後日、制作者にとっては大いに参考になったようだ。

当日はあいにくの空模様で途中からは大雪に変わり、九十九里の銅像などは雪の中で傘を差しての取材となり忘れ難い思い出として残っている。

実行委員会では酒井君から何案かの銅像の形式が出され、私たちの基本的なポリシーとして、偉人であるからと見上げるような形にしたいくない。親しみをもつて接することが出来るように、なるべく低い台座の立像に・・・という希望が委員会でご理解頂けたのは幸いであつた。

委員会での主要な議題のもう一つは、募金の割り振りの問題であつた。この不景気な時代に二〇〇〇万円などという大金が一体集まるのだろうかと不安になったが、委員会の錚々たるメンバーは強烈な忠敬ファンで、何とかなるでしょうと動じる様子もないのはさすがだつた。

五月四日には横浜の酒井君のアトリエに、高さ四〇センチほどのミニアチュアが完成、初めて立体像としてのイメージを見ることが出来た。これは石膏取りされ、五月二三日の実行委員会で披露された。伊能図がレリーフされたパネルから片手に彎剣（わんからしん）を持って胸を張り、正面を見据えて第一歩を踏み出したイメージは好評で、いよいよ本制作に取り掛かることになる。

七月一五日にはほぼ一トンの粘土を使つたという原型がまとまつ

たという話を聞いて、渡辺さんと共にアトリエに伺ったが、見上げるとような実寸の量感には圧倒された。細部では希望を述べる個所もあり、特に衣裳の時代考証 については色々な意見が出た。後日、江戸東京博物館長の竹内先生にもご意見を伺い、また同博物館の小澤教授をご紹介頂いて御教示をうけた。制作者は松竹の衣裳部も訪れ、俳優座の「子午線の夢」伊能忠敬物語の衣裳なども参考にしようである。

腰の竹光の佩刀、彎窠羅鍼などは佐原市の伊能忠敬記念館の実物を取材し、忠実に写している。袴のデザイン一つでも、忠敬が実際に着用したものを厳密に特定することが、非常に困難な作業であることが良くわかった。

制作者・酒井君にとっても一世一代の大仕事、代表作の一つになるのは間違いないことで、さぞ目に見えない苦勞をされたことだろう。

八月一〇日には石膏取に入る直前の最終チェックに酒井アトリエ



を訪れた。全体に引き締まり、風貌も精悍になって気合の入った忠敬さんに、正直なところ安堵の息をもらした。

そして九月四日、実行委員会幹事会の後、起工式が桜井権宮司始め4名の神官によつて厳かに執り行われた。私、富岡宮司、渡辺建立委員会事務局長、制作者・酒井道久氏の4名で鑑入れ式を行い正式に着工した。基礎屋さん、石屋さん、ブロンズ屋さん3名も列席された。

これに先立ち、実行委員会幹事会では、これまでタイトルを「伊能忠敬先生像」で進めてきたが、「伊能忠敬像」とした方がよりアピールするのではないかと訂正された。

募金も一九〇〇万円を超えて、ほぼ目標額に達したと報告があり一安心。忠敬パワーの偉大さに改めて脱帽である。後は一〇月二〇日除幕式関連の詰めを行ったが、どのようなことになるのであろうか。

制作の方では、最後の工程であるブロンズの鑄造作業、背景の黒御影石に伊能小図による日本列島を彫る作業、タイトル文字、裏面の銅版制作、土台の石組みなど、まだまだ多くの作業が残っている。すべてが順調に進むことを祈るのみである。

東京では初めての忠敬像が広く一般の方々に親しまれ、忠敬の生き方や仕事理解されるきっかけになればこれに勝る喜びはないが、今回の募金に協力して下さった多数の方々のお力添えがあつてのことと、忠敬先生も驚いておられるのではないだろうか。

大雑把に忠敬像建立の経緯を綴ってみたが、筆の足りないところはお許し頂きたい。

(九月一〇日 記)

(いのう ひろし 忠敬銅像監修者・伊能忠敬より七代の子孫・洋画家)

## 伊能の家に生まれて

井上 靖子

最近思うことがある。伊能の家に生まれた私がもし、ずっと佐原の家に住んでいたならば、代々受け継がれてきたものが果たして自然に身につく、佐原との横の繋がりを持ちながら、静かなブームに応えて、日本中に情報発信できていたであろうかと。

忠敬より六代目となる父・康之助は、佐原中学を卒業後、東京の大学に進学し、やがて商社マンとなり、当時は日本の植民地であった大連に赴任、私はそこで生を受け、小学校四年生までを過ごした。

夏休みには、殆ど毎年船旅をして佐原の祖父母の許を訪れた。夏休みのお手伝いの一つが、忠敬宅訪問の見学者に、遺品を旧書斎の縁先に広げてお見せする祖母・孝（こう）の隣に座って、硯の墨をすることだった。

祖母は、縁先にキチンと正座して、「皆さま、よくいらつしやいました。ここに掲げましたのが大中小三通りございますなかの、中図でございます。歩合は（縮尺の意）二十一万六千でございます。」と始まる。ついで量程車・半円方位盤の説明をし、質問に答えるという順序であった。そして最後に芳名録に筆で御署名頂くことで終る。

見学者が帰られると、サツと地図を巻き、床の間に立て掛け、量程車も床の間に戻す。時を経ずして見学者が訪れると、急いで又これを繰り返すのであった。

八十八才で亡くなる直前まで、応対の間にもお蔵や薪倉・味噌倉への物の出し入れを自分でこなし、席の暖まる暇もなかった祖母の日々

は大変なことだったと思う。父の転勤で東京に帰ってから、夏休みやお正月には佐原へ行くのが私の慣いであった。

女学校受験の口頭試問で、伊能忠敬との関わりを訊ねられたのが、祖先を表立って意識したはじまりだったように思う。だが、大陸育ちのケ・セラ・セラの性格は、それによって祖先の重みとか思惟を深くすることもないままに過ごしてしまった。

祖母から母へ、そして母と同居の義妹・陽子へと、忠敬の遺品継承に、代々嫁が関わっていくことを目の当たりにしてきた。そして妹が古文書の勉強もし、母の片腕ともなったので、母の喜びはたいへん大きかった。その繋がりに、あらためて敬意を表したい。

やがて伊能忠敬研究会が生まれ、全国にそれぞれの面で共感を覚える方々が多数あることを知り、遅ればせながら入会させていただいて勉強をしている。

伊能ウオークが埼玉を通った折りは、所沢市役所で市長さんと共にウオーカーのみなさんをお迎えし、翌朝、多摩湖まで一緒に歩いた感動は大きい。二百年後にまで、大勢の人々に色々な形でエネルギーを与えてくれる先祖の忠敬先生に改めて畏敬の念を抱いている。

（伊能家六代目康之助長女）

編集部注 文中に出てくる芳名録は、本誌で毎号紹介している

「芳名録」である。



## 『官板実測日本地図』論考 (一)

— その編纂過程と図の内容・種類 —

高木 崇世芝

伊能小図にもとづいて作成された『官板実測日本地図』（全四枚組）は、日本地図学史上においても、また、多くの古地図の中でも知名度が高く、地図関係者にはよく知られている。しかし、そのわりに評価は必ずしも高くはない。その理由は多分つぎのようなことであろう。

①伊能図を基本としていながら伊能図そのものではない。

・伊能図に描写されていない地域や内陸部が追加され、さらに、伊能図にないカラフト島図までも加わり、伊能図とは別図の扱いを受けている。

・伊能図（小図）と同じ縮尺をもつ大型日本図でありながら、彩色が水色と灰色の二色という地味な図で、伊能図の精彩で華やかな感じが見られない。

②幕府終焉の直前に刊行されたためか、幾度も版を重ねながら、明治以降の近代地図作製に影響を与えた形跡がない。

③現存数が多く、ごくありふれた図と見做されている。

以上のようなことから本図は、伊能忠敬研究でも、伊能図研究でもわずかに触れられる程度で大きく取り上げられることはない。また、本図について言及した文献を読んでみても、必ずしも正確といえないものがあり、編纂から刊行にいたる経過や、地図そのものを詳細に調

査した論文も見あたらない。本稿では、『官板実測日本地図』に言及する文献を検討しながら、これまでの調査結果を述べてみたいと思う。



## 一、編纂から出版までの経過

『官板実測日本地図』（以下、官板実測図と略称する）の編纂や出版に関わる文書は、倉沢剛氏の『幕末教育史の研究（二）』と福井保氏の『江戸幕府刊行物』に掲載され、ほかに『樺太概覧』にも記述がある。いずれも全記録ではないので、その全容を知ることができないが、年月を追って経過をたどってみる。官板実測図の出版がいつ計画され、いつ実行されたかは、はっきりしないが、次のような記録がある。

伊能勘解由著述仕候実測地図之儀は去酉年八月中、対馬守殿御書取を以官板彫刻被仰付（注1）

これによると計画の発動は、文久元年（1861）八月頃ということになる。そして、九月には大久保伊勢守・古賀謹一郎等の連名で老中に次のような文書が提出される。

実測図官板被仰付、板下絵図追々写方仕罷在候処、右絵図面ニハ蝦夷北地之分四十六度を限り、東南之方ハクナシリ島迄ニて其余無之、殊ニ北（ママ）蝦夷之方海岸而已地名有之、内地山野之名ハ一切不相見、且又琉球嶋無人嶋等も無之、右ハ此度彫刻出来之上ハ、夷人江も御渡可相成哉之趣、左候得ハ向來若御不都合之儀も、出来仕間敷哉之旨、絵図写し方之者共申聞候（注2）

ここでは「伊能図」には蝦夷地は四十六度、すなわちカラフト島南端まで、千島はクナシリ島までしか描写がなく、また、蝦夷地は海岸のみに地名があり、内陸の山野には地名等が一切無い。また、琉球島も

小笠原諸島も描写がない。完成後、外国人の手に渡すこともありうるので都合が悪いのではないかと述べている。

これに対して、同じ九月に外国掛大目付・目付も次の文書を出す。伺之通御許容相成可然奉存候、然ル処世上旧來伝播いたし居候地図ニてハ、実測とハ難申候間、近來外国人持渡品之内、精詳之図相撰、尤地名等ハ箱館奉行取調候絵図、并前田健助取調候所見合外国人より名付候地名等ハ、一切不相用方と取極有之心得を以、補入可致旨被仰渡可然奉存候（注3）

すなわち、「大久保伊勢守等の言う通りであり、伊能図に描写されていない箇所は、他の図から補つてもよいが、世間に出回っている地図は実測とは言い難いので、近年、外国人が持参した精詳な図を選んではどうか。但し地名については、外国人の付けたものは一切用いず、箱館奉行が取調した絵図、または、前田健助が取調べたものを用いて補入してはどうか」と述べている。

この中の「箱館奉行取調候絵図」と「前田健助取調」については後述する。次に、これも同じ九月に勘定奉行・同吟味役が提出した文書をあげる。

奥蝦夷并琉球無人嶋等、補入可仕哉と之儀、御国属嶋相洩居候てハ、外国人江御渡之節御不都合哉ニも相聞候得共、世上有舐れ候図面を以補入いたし候ハ、自然実測と違ひ、却て測驗無之と之謗りを醸し（中略）実測を不尽分除置候ハ、西洋普通之趣ニ付、属嶋等書載無之候とも、御不都合と申訳ニも無之、尤口蝦夷内地山野之名書入候儀ハ、前田健助差上候地図を以、補入いたし候ハ

、實測に差響申間敷候間、右之分而已補入いたし候方ニも可有之哉（注4）

この文書は「我が国の属島であるカラフト島、琉球、小笠原諸島等が洩れていては外国人へ渡す際に不都合である。だからといつて世に流布している図を補入したのでは、これらは実測図でないから却て伊能図までも実測していないとのそしりを生む。実測していない部分を除くことは西洋では普通のことであり、属島などの記載が無くとも不都合ではない。ただし、蝦夷地の内陸部に前田健助の地図を以て山野の

十月十六日	實測日本地圖と補入仕候柯太地圖之 儀二月相伺候書片	林 大孝廣	林 式部少輔	岡 成所隠家	月石史	同奉八月申附島々殿御書取立書板船利 云 御書より更に出立仕候云々在地等々版 牙北地、分緯線四格六度上段、東南の方 より千シリ島迄云々有、名若屬、概々地 且又琉球が並島諸島浦入、後同年九月 申相伺候書片同人也書取立琉球が並島 東陸天妙々エト口フ々等々、且因寄 也地云々、抄と云ハ陸水向看是、云
-------	------------------------------	-------	--------	--------	-----	--

權太概覽（二編十五）

地名を書き入れるのは実測図に影響しないからよいだろう」という。こうして種々の意見があつた後の十月、外国奉行・水野筑後守等はつぎのように老中に答申した。

伊能勘ケ由測量日本図ニハ、蝦夷地嶋々之内クナシリ嶋迄ニテ、エトロフ嶋不相見、小（ママ）蝦夷地も纔ニ嶋形のみ記し有之候得共、素よりクナシリ、エトロフ共全嶋、北蝦夷地も五十度迄ハ、当今も全く御付属ニ御座候、無人嶋之儀ハ、古来より御付属之趣ニ申伝ヘ、此程水野筑後守江御用被仰付、取調罷在候竹嶋之儀も、同様御付属と申伝候処、元禄年間朝鮮国江御付与相成候由ニ有之、琉球国之儀ハ、御国并清国江服従仕居候段、外国人も粗弁ヘ居候趣も相聞候ニ付、全く御省ニ相成候てハ、後來御不都合之儀難斗ニ付猶勘弁仕候処、右琉球国竹嶋并蝦夷地エトロフ嶋以来（ママ）の嶋々、同北地ニ五十度以北ハ、絵図面着色仕置候ハ、御辞柄も相立可申且測量行届不申候嶋々迄、補入致候てハ、実測原図まで不信用ニ可相成との儀、無謂儀ニハ無御座候ヘ共、勘ケ由撰図迎も、必相違無之とハ難申、各国図とも最前ハ概略ニテ、近年精密ニ至り候儀ニ付、悉く不信用之儀も有之間敷、右嶋々当今御省キ相成候ヘハ、後來外国より恣ニ開拓致候節御辞柄相立兼、蚕食之辞柄ニ屈し候よりも、補入いたし御開拓御盛業相成候方可然奉存候間、前文嶋々補入いたし、都て同之通り被仰渡可然奉存候（注5）

要約すると、「伊能図にはクナシリ島までしか描写がないが・エトロフ島やカラフト島の五十度までは我が国付属の島々である。また、小笠原諸島、琉球国も省けば不都合になる。琉球国、竹島、エトロフ島以東の島々、カラフト島の五十度以北には着色すれば問題は無い。測量していない島々を補入すれば、伊能図までも信用が無くなる」との

意見があるが、伊能図とて相違がないとはいえない。よって、これらの島々の精密な図を以て補入すべきである」という。これらの意見によつて十一月十五日、幕府は次のように決定した。

書面伺之通相心得、尤琉球小笠原島并蝦夷地エトロフより東之嶋々、且同所北地五十度より北之方ハ、絵図面着色いたし、近來外人持渡之内精詳之図相撰、地名ハ箱館奉行取調候絵図、并前田健助取調候品見合、外人より名付候地名等ハ、一切不相用方と取極、補入候様可致旨（注6）

これで様々な意見は集約され、伊能図にない島々をも記載することが決定した。それは、「我が国の付属でない島や地域には着色して識別する。近年外国から伝來した精密な図をも参考とするが、外国人が命名した地名は一切使用しない、蝦夷地やカラフト島の地名は、箱館奉行の取調絵図、前田健助の取調書を使う」というものであった。

ここから二年間程の記録がなく不詳であるが、文久三年十月、林大芋頭・林式部少輔・開成所頭取の連名で、カラフト島地図補入の件で次のような文書が提出された。

当正月、魯西亞献上之絵図類、外国奉行より請取相成候二付、柯太嶋之内抜萃致し上木出来之図と比較仕候處、經（ママ）線五十度（ママ）三度より五十四度之辺測量之不便なる場所に有之哉、地位余程之相違有之候二付、猶又勘考仕候處、五十度之辺も海岸之地形岬崎之屈曲に因て万一測量相違之廉有之候も難斗（中略）篤と御取調之上着色御取極相成候方可然、且絵図之儀も両様之内何れを御採用相成候義ニ御座候哉（注7）

この文書では、「ロシア国から献上された絵図類からカラフト島の部分を抜粋して木版図と比較したら、緯線五十三度から四度にかけては、測量しにくい場所らしく、かなりの相違がある、五十度付近も海岸の地形や崎の屈曲によつて測量の違いがないともいえない。よく調べて国境の着色のことと、両図のいずれを採用すべきか伺いたい」と述べている。これに対し翌十一月に次のように文書で回答された。

即今五十度を限り着色彫刻候とも山河之形勢無余義場合より少々之出入有之間敷とも難申、其節に至り相改候様ニ而は不都合此上も無上、一体御国の接壤經界は猶北方魯西亞而已ニ而、其他大方相接し候様之場所も無之ニ付、界線相用候迄ニ而、一目瞭然ニ可有之間、内地逆も別段着色等には及申間敷（注8）

すなわち、「図は五十度に限つて木版にし、地形に多少の出入りがあつても不都合はない。我が国が他国と国境を接するのはカラフト島におけるロシア国だけであり、その他に国境を接する場所がないのであるから、国境を示す着色は不要であらう」というものであった。

翌年の元治元年（1864）九月、同じく林大学頭等三名の連署をもつて次のように老中に伺つた。

先般実測地図官板被仰付候儀ニも可有之、何卒速ニ世上一般之実用ニ相成候様仕度、尤去亥年十月中補入、カラフト嶋經界之儀ニ付、相同置候次第も有之候得共、右ハ即今御治定之御手続ニも難相成御儀も可有之哉、左候逆右御治定相成候迄、売弘メ等之儀、見合居候てハ際限も無之、折角官板被仰出候御趣意も相揃い兼、

方今急務之品を其儘打捨置候姿ニ相当リ、いかにも残念之至奉存候間、度々申上候ハ恐入候得共、最前相伺候通、カラフト地図ハ相除キ、其余之図面ハ当御場所於て為摺立、望之者江相渡、広く世上之用ニ相成候様仕度奉存候、依之実測地図切絵図三枚相添、此段奉伺候以上（注9）

この文書は、およそ次のようにいう。

「先年、日本実測図の官板を命じられたが、まだ世に出ていない。速やかに一般の実用に供したい。去年（文久三年）十月、カラフト島図の補入も決定したが、その国境の件はいまだに回答がない。いつまで待っても際限がなく、正確な日本図出版は急務であるのにそのまま放置されていて誠に残念至極である。何度も申し上げて恐縮であるがカラフト島図の件は後回しにしても、出来上がっている三枚は当所において木版摺して、希望する者へ渡して世上へ広めるべき、と思うがいかがであろうか」

官板実測図の出版計画が始まって既に四年目、林大学頭や開成所頭取等がしびれを切らして、一般への発売を急いでいる様子を読み取ることが出来る。ついに同年十二月、老中は次のような文書をもって指示するに至った。

書面伺之趣ハカラフト嶋より相加へ、分界領分等ハ不致摺立、売渡方之儀ハ書肆江相渡候ハ見合、開成所江願出候もの江、御松下相成候様可取計旨（注10）

「カラフト島図を加えるが、その国境などは木版摺しない。販売に

については、書店に渡すことは見合わせ、開成所へ願出た者に払い下げる」というものであった。官板実測図に関わる文書は、ここまでである。こうして官板実測図の内、三枚は丸四年の歳月をかけてようやく完成し、販売の方法についても決定した。

しかし、四枚目のカラフト島図がいつ木版として作成されたのかについては、まだ不明の点が多い。

## 二、洋学機関の業務と変遷

ここで、官板実測図を出版した開成所の成立とその業務についてふれておきたい。開成所の前身は洋学所であり、その後、蕃書調所・洋書調所と改称する。後身は大学南校である。その系統は次のとおりである。

- ① 洋学所（仮称）安政二年（1855）八月発足。頭取・古賀謹一郎
- ② 蕃書調所 安政四年一月十八日開設。頭取・古賀謹一郎
- ③ 洋書調所 文久二年（1866）五月十八日に改称。学問所奉行および林大学頭の管轄となる
- ④ 開成所 文久三年八月二十九日に改称。頭取・木村摂津守喜穀
- ⑤ 開成学校 明治二年（1869）一月に改称。明治二年六月、開成学校・昌平校・医学学校の三校を統合して大学校となり、開成学校は分局となる
- ⑥ 大学南校 明治二年十二月十七日に改称。大学校が大学となり、それに伴い改称するが、同年七月、独立する
- ⑦ 南校 明治四年七月に改称。文部省が設置され、大字を廃止して改称する



幕末期の洋学所から開成所までは、開国以後の軍事・外交上の必要から洋学専門機関として設置され、洋書の翻訳と洋学教育を主目的とし、併せて洋書・翻訳書の印刷や出版を行った。地図の翻訳や作製に関する業務はもとは天文方が行っていたが、開国以後、世界図の翻訳や日本図の作製は洋書調所や開成所で行うようになった。官板実測図が開成所で編纂されたのはそのためである（注11）。

### 三、出版年月の推定

初版は開成所から発行されたが、その図には刊記が記載されていない。そのため、従来から多くの研究者によつて出版年の推定がなされてきた。その代表的なものを挙げよう。

○蘆田伊人氏 慶応元年頃（昭和五年・日本総図の沿革）

○秋岡武次郎氏 幕末刊（昭和三十年・日本地図史）

○笠井助治氏 慶応中（昭和三十七年・近世藩校に於ける出版書の研究）

○保柳睦美氏 慶応三年（昭和四十九年・伊能忠敬の科学的業績）

○岩田豊樹氏 慶応三年（昭和五十年・日本絵図並万国全図集成）

○山本武夫氏 慶応元年（昭和五十四年・伊能図・国史大辞典1）

○伊能忠敬研究会 慶応三年（平成十年・忠敬と伊能図）

このようにいずれも慶応期であることは共通しているが、出版年はまちまちであり、何よりもそれを推定する根拠を一切示していない。この中であつて唯ひとり、出典を示して推定したのは、福井保氏である。福井氏は、その著書『江戸幕府刊行物』の中で次のように記している。

丙寅正月二十三日

仏国博覧会之節可被差遣御品之義に付申上候書付

西暦千八百六十七年第五月一日、仏国都府於て博覧会之節、御差廻し相成候様いたし度旨、同国公使申立候品々之内、御国図之義は、開成所において開板相成候伊能勘解由編述之実測地図御差廻し相成候様仕度、右図は先年英国測量船江写図に而御渡相成候義も有之、被方二而も精微之段は賞讃いたし居候趣に付、御差出相成可然と奉存候、右之趣可然被思召候は、兼而摺立置候内に而鮮明之分相撰仕立、箱等別段念入、五部程早々御出来、私共江相渡候様、開成所江被仰渡可被下候、依之此段申上候、以上（徳川昭武滞欧記録第二冊所収）

すなわち、慶応二年（1866）正月、幕府は出版された官板実測図をパリ万国博覧会に出品するため上申して、この文書は、図の刊行年月の下限を示し、刊年は慶応元年に限定される」と福井氏は述べている。筆者もこの「慶応元年刊行」説に賛同したい。

### 四、発売元と再版広告

『中外堂発兌書目』（注12）というものがあり、それには開成所出版の書籍や翻訳書が多く見い出される。地図は次のものが載る。

実測日本地図 伊能忠敬 箱入四帖

大日本沿海略図

亜西亜略図

万国輿地全図

駿河国略図

西洋各国盛衰強弱一覽図表

中外堂(堂名)の屋号は上州屋といい、福田惣七なる者が慶応年間から明治にかけて経営した版元らしい。  
次に中外新聞・第廿五号(慶応四年閏四月十六日発行)に次のような広告が掲載される。

大日本実測地図 伊能勘解由実測 開成所板 箱入

右暫く売切に相成居候処、此節前板の誤字を校正いたし、製本出来に付乍序布告いたし候

併せて「亜西亜略図・西洋各国盛衰強弱一覽表並図」の広告も載っている。中外新聞は、慶応四年三月、開成所頭取となつた柳河春三が出版したものである。中外堂といい、中外新聞といい、いずれも開成所と深い関連があることを示唆している。なお、この広告については、古くは栗田元次氏(注13)が、近年では福井保氏(注14)が言及している。

(つづく)

注記

- 注1 『樺太概覽』二編十五による  
注2 『幕末教育史の研究(一)』による  
注3 同  
注4 同  
注5 同  
注6 同

注7 『樺太概覽』二編十五による

注8 同

注9 『幕末教育史の研究(一)』による

注10 同

注11 洋学関係の各機関については『洋学史事典』が詳しい

注12 『幕末維新の書林目録(完)』による

注13 「江戸時代刊行の古地図」による

注14 『江戸幕府刊行物』による

(会員・札幌在住、元中学校美術教諭 たかぎ たかよし)

伊能ウオーク番外編・パートII

日南〜大隅半島〜桜島 一二三〇キ

2002年の伊能ウオーク番外編は平成十四年一月に開催される。予定コースは以下のとおり。

- 十八日 宮崎県日南市飯肥城公園〜日向おおつか駅  
十九日 日向おおつか駅〜鹿児島県志布志町役場  
二十日 志布志町役場〜高山町役場  
二一日 高山町役場〜田代町役場  
二二日 田代町役場〜佐多岬・さたでいホール  
二三日 さたでいホール〜緑の回廊  
二四日 緑の回廊〜終原小学校  
二五日 終原小学校〜桜島ビジターセンター

『家牒』

(二)

小島 一仁

景満・本宿市立成らず

佐原伊能家三代目の景満は、元和五年（一六一九）、三十一歳で家督をつぎ、佐原村本宿組の名主をつとめると共に新田開発にも力を注いだ。また、彼は、寛永二〇年（一六三六）、四八歳のとき、佐原村浜宿組の名主長沢次郎右衛門（法名日俊）、御料所名主小倉助右衛門と申し合せ、本宿側にも市を立てようと計画し、実際に、この年二月二日に市を立てた。しかし、これは、新宿側住民の激しい反対にあい、一時は、正式の公事になりかけたが、本宿組地頭の天方主馬と新宿側上宿組の地頭近藤勘右衛門らの内々の話し合いにより、本宿側に市をたてることはやめになった。その経緯は、後に六代目の景利がまとめた『先年ヨリ市出入之留書』にくわしく記されている。『家牒』にもこのことに關して、本宿組地頭の天方主馬との交渉にあたつた近藤縫殿助（勘右衛門の一族）の書状（近藤勘右衛門宛）の写しがのつているので、次に、それをお目にかけよう。この書状によって、本宿側に市をたてることは、地頭の天方主馬によつて禁止されたことがわかるであらう。

天方主馬様  
 先年ヨリ市出入之留書  
 近藤縫殿助  
 天方主馬様  
 先年ヨリ市出入之留書  
 近藤縫殿助  
 天方主馬様  
 先年ヨリ市出入之留書  
 近藤縫殿助

△釈文▽

尚々主馬百姓ニ市立

させ申間敷候由かたく

内々の市公事の主馬所より

彼等方へ申来候、左様ニ御心得可

夕部申来候、市立させ申

被成候、以上

間敷候由かたく申し来候

公儀へ御出し候事御無用ニ

可被成候、以来共いよく

かたく申付可申旨いづれも

被申候間、左様ニ御心得可被成候

委は掛御目可得御意候

こま／＼儀御越候て御見せ可

給候、恐惶謹言

三月二日

花押

文中、文字の欠落しているらしいところがあるので  
それは、『部冊帳』等を参考にして、おぎなうて読んだ。

景満は、この市立をくわだてた年に、即ち寛永二〇年（一六三六）に  
四八歳で隠居して、家督を嫡男の景善に譲り、万治四年（一六六二）  
七三歳で死去した。

景善・記録を志す

四代目の景善は、父と同様、新田開発に励んだが、北方の新島領の  
村々との間に、土地境界の争論がおこって非常に苦労した。それ故、  
景善は子孫のために役立てようとして、根郷五ヶ村（岩ヶ崎村・佐原  
村・篠原村・津宮村・大倉村）による新田の開発や新島領村々の開起  
等についての記録をまとめはじめた。しかし、その志なかばで、寛文  
二年（一六六二）、三九歳で死去した。景善自身が記したその記録の序  
文の写しが『家牒』にのっており、また、後年、六代目の景利がまと  
めた『部冊帳』（第一巻）や『根郷五ヶ村谷地御定納記』にも同じ文章  
がのっている。次に、それを紹介したいと思うが、『家牒』にのってい  
るものは、脱字等があるようなので、ここでは『谷地御定納記』のも  
のをとりあげることにした。

定納記序

五月雨の降くらしき寂莫に朋友四人のまちはり  
 毎にむつまじくうち見えて、来方行末の物語などし  
 んだをわらう一人かいひ侍るハ近年隣島と古言の  
 あらそひ、いまた秋にはあらねども身に入くとおもひ  
 侍れども、自他若年の交りにて古き事をしらず  
 頭をうなだれて膽をけし数日をおくるといへども  
 知る事を得ず、爰に老いたる人世を厭ひ仏名を唱  
 ひしんく居侍る有、然るに彼所へ行いにしへをとふ  
 老翁答へていはく、予若年の年々をつとふるといへ  
 とも其有様をしらず、往古より書記たるものを求めて  
 見よとおしへしにより爰かしこと尋求る処に、いにしえも  
 すへくかく有べき事を知り給ふ人一通の筆跡を残せる。  
 有、其流より記録を襲し事漢の長良が一卷の書を  
 得て悦びしもわれ今此書にしかち、誠に夏の世の月  
 に村雲のかゝりたるに涼しき風の音信で堪なる  
 雲間より月ほのかに顯ハるゝ心地して終に理運を得  
 たり、されバ正直ハ一旦の依怙にあらずといへども終には  
 日月のあはれミをかうむると仰おかれし言の葉今わ  
 か身の上に應ひあわせ猶有かたくおもはれける

万治七年 夏中書之

伊能三郎右衛門景善  
 法名 廓法宗恵

定納記序

定納記序

五月雨の降くらしたる寂莫に朋友四人のまちはり  
 実にくつまじくうち見えて、来方行末の物語などし  
 はんべる、折から一人かいひ侍るハ近年隣島と古言の  
 あらそひ、いまた秋にはあらねども身に入くとおもひ  
 侍れども、自他若年の交りにて古き事をしらず  
 頭をうなだれて膽をけし数日をおくるといへども  
 知る事を得ず、爰に老いたる人世を厭ひ仏名を唱  
 ひしんく居侍る有、然るに彼所へ行いにしへをとふ  
 老翁答へていはく、予若年の年々をつとふるといへ  
 とも其有様をしらず、往古より書記たるものを求めて  
 見よとおしへしにより爰かしこと尋求る処に、いにしえも  
 すへくかく有べき事を知り給ふ人一通の筆跡を残せる。  
 有、其流より記録を襲し事漢の長良が一卷の書を  
 得て悦びしもわれ今此書にしかち、誠に夏の世の月  
 に村雲のかゝりたるに涼しき風の音信で堪なる  
 雲間より月ほのかに顯ハるゝ心地して終に理運を得  
 たり、されバ正直ハ一旦の依怙にあらずといへども終には  
 日月のあはれミをかうむると仰おかれし言の葉今わ  
 か身の上に應ひあわせ猶有かたくおもはれける

万治四年 夏中書之

伊能三郎右衛門景善  
 法名 廓法宗恵



『根郷五ヶ村谷地御定納記』に記されている説明によると、右の文中、最初の行にある「朋友四人」とは、林内藏丞・伊能茂左衛門・長沢次郎右衛門・伊能三郎右衛門（景善）のことであるという。この四人は、それぞれ、佐原村上宿組・下宿組・浜宿組・本宿組の名主をつとめていた。また、七行目に、「老いたる人世を厭ひ」とあるのは、「伊能勘解由法名濟尉宗閑」、即ち、三代目景満の隠居後の姿である。景満は、景善がこの文章を書いた年、七三歳で没したのであるが、景善もまた、その翌年、寛文二年（一六六二）、三九歳の若さで死去したのである。

# 景知・酒造をはじめ

寛文二年（一六六二）五代目の景知が家督をついだ。『家牒』の景知に關することを記したところでは、次の文章が目につく。

一延宝六年（一六八八）常陸国牛堀村平八郎より名主七右衛門加印  
二而酒株名代先年酒造米高五百六拾石、寛文十一年より酒造  
米高七拾石株代金拾兩二而買請、初而致酒造商売候  
右七拾石株之内三拾株は享保九辰年正月伊能  
三郎右衛門景利方より長沢仁右衛門景寿へ分ケ株成ル

一延宝六年春より、常陸国牛堀村平八郎より名主七右衛門加印  
二而酒株名代先年酒造米高五百六拾石、寛文十一年より酒造  
米高七拾石株代金拾兩二而買請、初而致酒造商売候

右七拾石株之内三拾株は享保九辰年正月伊能

三郎右衛門景利方より長沢仁右衛門景寿へ分ケ株成ル

景知は、常陸国牛堀村（茨城県行方郡牛堀町）の平八郎という者から、金一〇兩で酒造株を買い請けて、延宝六年（一六七八）から酒造をはじめた。この時買請けた七〇株の酒造株のうち、三〇石は、六代目景利のときに、長沢仁右衛門に譲渡されたものである。長沢仁右衛門は、景利の実弟であるが、故あって、長沢家をついでいたのである。景知が、酒造をはじめたことは、伊能家に於ける酒造の開始であつたと同時に、佐原村に於ける酒造の開始でもあつたらしい。

また、この頃、伊能家では、すでに、「小給所方運送之儀」を行つており、「小前貸並ニ江戸米商売等専ニ渡世致し候」とも記されている。伊能家は、もともと、佐原村草分けの太百姓であつたのだが、五代目景知のころから、酒造をはじめとして、旗本知行地の年貢米の運送、小百姓への貸金、江戸での米穀売買など、商業活動によつて、財を築いていったのであろう。

景知は元禄七年（一六九四）八月、四九歳で死去したが、生前、娘のたん（小倉次左衛門妻）に金二〇〇兩の遺金を与えたほか、身よりの者たちに、それぞれ相応の遺金を与えている。

璿璣玉衡

(せんき ぎよくこう)

(辞典)

漢和辞典『字源』(簡野道明著)に

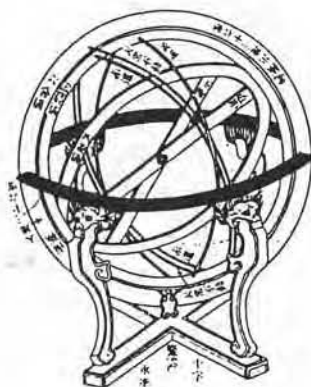
依れば、璿璣玉衡は渾天儀のこと。

璿璣 玉(ぎよく)に次ぐ美石。

璿と玉は美称と考えられる。

璣は天文を正す器。

衡は渾天儀のよこぎ。



玉璣璇  
衡  
諸橋轍次

玉璣 璇

衡 諸橋轍次

\*もろはし てつじ (一八八三—一九八二)

昭和期の漢学者・中国哲学者。号は止軒。東京高師卒業後、母校教諭に任ぜられ、文部省在外研究員として滿二十年中国に留学。帰国後、母校教授、東京文理大教授をつとめられた。昭和三年から漢和辞典の編纂を開始。「儒学の目的と宋儒の活動」で文博。途中、戦災に会うなどの困難を克服し、「大漢和辞典」全一三巻を完成。昭和四〇年文化勲章受賞。

(三省堂コンサイス人名辞典)

渾天儀については『古天文学の道』(齊藤国治著)所載の「浅草天文台の図」(葛飾北

斎画)の渾天儀は簡単過ぎてちよつと要領を得ない。右の図は『字源』の図版をコピー

したもの。この図版と『大日本百科事典』の渾天儀の項を突き合わせて見ると、イメー

ジがかなり具体的になる。少し長いが引用する。

渾天儀・六合儀、三辰儀、四遊儀の三つの部分を組み合わせる。

六合儀・最外部にあつて3個の円環がかみ合わさり、台上の支柱に固定されて

いる。3個の環は地平、赤道およびそれに直角な環である。

三辰儀・六合儀の内側にあつて、4個の円環が組み合わされ、南北極を軸とし

て回転する。

四遊儀・最内部にある四遊儀には南北に動く望筒があり、この望筒で天体を観

測し、円環に刻まれた目盛りにより天体の位置を読み取る仕組み。

諸橋先生が『衡玉璣璇』と逆順で書かれたことに大変興味を覚えました。プラネタリウムなどに行つて、天空を見上げながら、地平線に近いほうから「あれが『星七斗北』だ」と眺めるあの感覚です。浅草天文台の観測器を見上げて『衡玉璣璇』と感したのでしょうか。臨場感があつて面白いと思います。学識が深いからこそ出来る言葉遊びでしょう。

(高橋和夫)

## 伊能忠敬の歩幅

齊藤 国治

昨年は伊能忠敬ブームで日本縦断ウォーキング大会が盛大に催されたが、ブームの発端は小説家井上ひさし氏(一九三四-)の小説『四千万歩の男』であつたらしい。この小説は昭和五一年(一九七六)一月に『週刊現代』(講談社)に連載をはじめ延々五年も続いた。後に製本されて『四千万歩の男・蝦夷編』上・下(一九八六)と『同・伊豆編』(一九八九)の三部作となり、いまでは文庫本も出ている。

ところで、井上氏は小説の巻頭第一ページに忠敬の歩幅は「二歩で一間」と書いている。これは忠敬が江戸深川・黒江町の自宅から永代橋の橋詰め(深川側の橋板)にかかったところまでの歩数が、九〇六歩(別に九〇四歩とも)であり、この距離は別に実測から七町三三間(つまり四五三間)と得ているから、忠敬の歩幅は結局「二歩で一間」なのだろう。

わたしもはじめはこの換算率は確かな根拠があつてのことと思つていた。井上氏は小説を書くに当たり、いろいろと史料を集めておられたことはこの小説を読めば分かる。事実井上氏は、佐原の伊能忠敬記念館に数回足を運んでおり、あるときなどは閉館時刻の後までねばつていて、館員に注意されて退出したとも書いている。しかしこの「二歩で一間(一八二センチ)」つまり「一歩が九一センチ」というのは普通の日本人としては大きすぎて納得がいかなかった。

わたしは戦前の旧制中学校上級科で「軍事教練」と言うものを受け

ており、そのとき「歩測の仕方」を教わった。それは一〇〇メートルを何歩で歩くかという教練で、わたしの場合「一歩が七二センチ」であつた。この値はいまでも覚えていいる。また、旧日本陸軍の歩測法は二歩を「一復歩」と唱えて、二歩ごとに一復歩を増す仕方であつた(二〇〇歩あるいて五〇復歩という)。歩いた復歩数にその五割を加えた数を歩いた距離(メートル)とした。(一〇〇復歩なら一五〇メートルとする)。そうなるように訓練して体を慣らしたのだ。つまり昔の日本陸軍の歩測法は「一歩が七五センチ」とされたのだ。すると井上氏の「一歩が九一センチ」は日本の兵隊さんの歩幅七五センチより格段に大きい。実際に試みても歩幅九一センチでは到底歩けない。

ところで、『四千万歩の男』の先まで読んで行くと忠敬の歩幅は突然「五歩で二間」に変わっている。(蝦夷編、下、の一〇一ページ)。この訂正は雑誌に連載中に読者からコメントがあつて、井上氏も納得して換算率を変えたものと思われる。この換算率でいくと「一歩が七二・七センチ」となりこれなら実情に近い数値である。もつともこの小説では全部にわたって「二歩で一間」の換算が守られているから注意。要するに井上氏の換算率は同氏の恣意的な設定と思われた。必要なのは伊能忠敬記念館にいつて此の件(忠敬の歩幅)について聞いたはずべきであつた。しかしそのことをしないままに時が流れていった。

昭和六三年(一九九八)五月二日の日、川崎天文同好会では「天文ハイキング」として佐原市の伊能忠敬記念館を見学する催しを企画した。わたしはこれ幸いと一行に参加した。この機会に館長さんにお目にかかつて忠敬の歩幅についてじかにお尋ねしてみたかったからである。さて館長さんの答えは「忠敬の『測量日記』には、歩数はすべて間(けん)に換算されてあるので、歩数の記述はありません。」とのことであつた。わたしはガツカリして名前も告げずに退出して、歩数の件

はそのまま立ち消えとなってしまった。ところが一九九八年の四月から六月にかけて、東京両国の江戸東京博物館で「伊能忠敬」の展示会があり、そのうちのある日に渡辺一郎氏（伊能忠敬研究会代表）による伊能図についての解説を聞く集会があった。わたしもそれに参加してお話を拝聴したが、帰りきわに同館の売店で『忠敬と伊能図』という立派な記念誌（B5版、一七八ページ）を購入した。帰宅後にこれを読んで行くとその一四二ページにきて「アッ」とばかりに驚いた。そこにはもと伊能忠敬記念館長の佐久間達夫氏による下記のような文章があつて、わたしが現れるからである。

「わたしが佐原市の伊能忠敬記念館に勤め始めて間もないころのことであつた。『すみませんが、井上ひさしという作家が書いた『四千万歩の男』という小説に、伊能忠敬の歩幅が「二歩で一間」と記してありますが、あれは何をもとにして書いたのでしょうか」との質問であつた。タイプを叩いていた私は思わず手をやすめ、声のほうに目をやった。そこには古希に近い男性が立っていた。

「え？ 忠敬の歩幅ですか。2・3日待っていただければ調べておきます。」質問された方はいかにも残念そうに、「そうですか」といって記念館をあとにした。

その日からわたしの忠敬の歩幅調べが始まった。記念館に保管されている忠敬の著書を一点ずつひもといで記述内容を確認した。調べ始めてから三日目になって、国指定重要文化財二番「雑録」のなかに次のような記述を見つけることができた。

享和二年戊 東都至白川里程・深川より曆局まで

木車一里二町三四間

酉年（享和元年） 銅車一里二九間三尺

曆局より千住宿まで 木車一里二町五一間

申年（寛政二年） 歩間一里一五町五六間 一町に一五八歩

酉年（享和元年） 銅車一里一五町五八間

「あ、これだ」。私は思わず大声をあげた。すぐ忠敬が長さの標準として用いた「折衷尺」により、一尺を三〇、三〇三センチとして換算してみた。 $30.303\text{cm} \times 6 \times 60 = 10909.08\text{cm}$ 、これを158で割れば、一歩は69.049cm。これにより忠敬の歩幅は約六九センチであることがわかった。以後、忠敬の歩幅について多くの方々からの問い合わせには「そう答えている」とあつた。

記念誌の奥付によると、筆者の佐久間氏は一九二八年に千葉県生まれ、千葉県教員養成所卒、千葉大学（教育学部数学科）長期研究生終了、もと公立小学校教頭。伊能忠敬記念館長、伊能忠敬研究会編集委員。著書『伊能忠敬の測量日記』・『新説・伊能忠敬』などがある。まさにここには一〇年前に名前を告げずに交わして別れた二人の会話が活字に再現されているのだ。わたしは早速渡辺一郎氏を通じて佐久間氏にお手紙を差し上げたところ、ご返事があつた。同氏は戦後の三十八年間を公立小学校に勤め、定年後は忠敬記念館に四年一ヵ月勤められたよし。これは両人の会見の時期にピッタリと合う。ご返事中には「斉藤様の質問により「雑録」の記述を発見することになり、斉藤様は私の歩幅調べの恩人に当たるわけです」と書いてあるのは恐縮であるが、人間、何が縁でつながるか分からないと思つた。

佐久間氏の調査で忠敬の歩幅は六九センチと確定して一件落着といえる。もつとも忠敬が歩測法を使つたのは測量第一年の一八〇〇年の奥州蝦夷地往復のときだけで翌年からは測量尺・測量綱などを使つてゐる。しかし忠敬にとって歩測は「早くて安くて十分信頼ができる測量法」として自信をもっていたらしい。（会員・元東京天文台教授）

## 内弟子・箱田良助の榎本家入籍事情

菅波 寛

箱田良助（のち佐太夫）は備後国安那郡箱田村（現在の広島県深安郡神辺町箱田）の出身で、兄の右忠太と同道して、伊能忠敬の門に入る（文化四年良助十七歳）。間もなく兄は夭折した。良助は専ら測量術等の研鑽に精励し、文化六年八月、九州第一次測量に測量隊員として従事する。この時の隊員としての誓約書「一札の事」（世田谷伊能家文書）は、伊能陽子様より「伊能忠敬研究第九号（一九九六年秋季号）」に紹介された。その後各地の測量が終了し地図作成の過程で、文化十三年に伊能忠敬は病床に伏し、地図御用は万事、佐太夫（この時は良助を改名後）に任されていた。左太夫の忠勤の状況がのべられている書簡（実弟の池田彦九郎宛）が残っている。

前略：当方勘解由先生御義、旧冬より御持病の瘵相発し、今に御臥床にて御長病殊に御老体の事故、一統心配罷在候、尤も暖氣に随い追々御快方被成一同安堵仕候、右に付御用向家事万事小子へ御頼御任せ被成候故、誠に用繁寸暇無之閑敷罷在候、夫に付小子へは御用済夜分等は保養に酒用ひ候様、内々先生より御免、外の人とは別禁、是迄数人の弟子中に無顧事、厚き恩召難有存罷在候。其上小子より申付候義は、家内同役迄も相背申間敷旨、定書

を認先生方へ差出し置候次第、先以御安悦可被下候、

後略：

三月九日

箱田左太夫

池田彦四郎様

左太夫の立場は、兄右忠太は江戸にて夭折、実弟彦四郎は備中国大江村（現在の岡山県伊原市大江町）の池田家へ養子入り。当然嫡子として実家を継ぐべき立場であった。しかし、江戸での立身の懇望を実家が認めたので、心気一転して改名する。いずれ幕臣身分の家へ養子に入りたい心境を、生々しく述べた書簡がある。文政四年二月二一日付、池田彦四郎宛の書簡は次の通り。

前略：拙者心願も実家相定、瀧 新五郎と名乗り、当時は御紋附着用いたし満悦の至、御同慶可被下候、尤も是より養子先得と相糺罷越候積に御座候、伊能勘解由測量地図も追々済寄、当年七月堀田撰津守殿御月番迄に是非上納可致積にて、下役の者一統出精いたし罷在候、右に付拙者義も勘解由より厚く頼置候一筆有之、但高橋作左衛門よりも相頼候義に附、矢張仮名、箱田左太夫にて右地図手伝いたし罷在候、上納後跡しらべ、二年、三年懸り候共、上納前今四、五か月は相頼候義もだしがたく尤も其内急養子直家督等の候得ば、拙者身分大事の義故相片付申候、何れ御代官か御勘定の内へ相片付、其地の筋へ出役致度所存に御座候、 後略：



箱田左太夫の榎本家へ養子入籍の事情については、榎本武揚に係わる文献で『加茂儀一著・榎本武揚・昭和三五年刊』によれば「榎本武揚の二男春之助氏に会い、榎本家蔵資料を拝見した。榎本家への入籍は、一説では文政五年頃だが、榎本家の系図によると、文政元年七月十八日榎本株を千両で買った」とある。この記述は後々の作家に引用されて今日に至っている。

江戸期当地の神辺宿で私学「廉塾」経営の菅茶山（通称・太中）に懇望され、その塾頭となった「北條霞亭（通称・譲四郎）」は、福山藩主阿部氏の命により、江戸阿部藩邸の儒官として文政四年四月、江戸出府を命ぜられた。そして同八月二三日には、命により妻子召致のため福山にもどっている。

この間、居宅普請をおこない、文政五年六月晦日には新居に移っているが、江戸在府中の北條霞亭は、菅茶山と昵懇の箱田左太夫の父細川園右衛門（二時箱田姓を名乗る）の要請で茶山の名代として、左太夫の養子一件にからむ本人の身分上の問題などにつき、福山藩と幕府の関係者の間を斡旋につとめ、かなり苦労した様子が次の二通の書簡により明らかである。

このなかでは、左太夫の榎本家入籍時の持参金は金五十両のよし、と述べている。「榎本株を千両で買った」という話は、勝海舟の曾祖父が巨額のお金で御家人株を買ったとされていることから推論されたものと思われる。

後学のために次の書簡で、当時の生々しい御家人への、持参金付き婿入りの手続きや様子などを紹介する。北條譲四郎差出、菅茶山宛の文政四年八月二五日付の書簡である。文中に私方新居（江戸の住まいの意味か）も追々片付居り馴染申候。とあり、また末尾に神

辺へ在住の妻子の消息も述べているから、妻子召致のため福山へ赴く命を受け、八月二五日、出立直後に認めたものとわかる。

前略 先書も申上候、箱田左太夫、只今源三郎と申し菅太中厄介にて、御妹の産み候子にて姪（注てつ・甥の事）といったし候名目、御相談申上置候名目、御相談申置候通に候、私源三郎へ申候は、備後の信を受候後、いかやうとも取計可申と申置候處、先方縁談甚取急ぎ、それに御徒士のあき跡名代は少しもあけ置申事相成らず候故、何分急に相談に及候やうと、せり立申候、内々は御徒士御頭付の組頭へも、己に申いたし、菅太中姪と申義達しに及、太中御国住居なれば、北條譲四郎於此表引受世話仕候と書き出し候由、私も当惑仕候得共、己に左いたし候上成ればいたし方無之と存候所、御徒士頭より当御屋敷へ聞合存候處、大目付の場にて一向承知無之、何分一応御国表へ聞合申候上、厄介とても御上に親類書等出し候わねばならぬぞと申され、然る處御徒士頭の方は再度にわたり御屋敷より返事無之候へば、破談に相成り候義、それに付先へ持参金も最早相渡し候義故、阿部様御屋敷の返事一条のみにて事破れ候、勿々何分とりあつかひ呉候様嘆き候義に付、私も甚気の毒にも相成、右に付御上屋敷大目付席へ、三日つづけ候て頼に参り候、漸く当日に御徒士頭へ返事相成り候様に首尾いたし候、扱々不存寄俗事にて大心配仕候、源三郎義何分私家を思同様にいたしくれと、太中先生のつづき故と達て申事に候、

…後略

森鷗外著『北條霞亭・その百五十七』に福山出身の浜野知三郎氏の写書した次の書簡の本文のみを掲載しているが、この度その書簡の原書コピーを入手した。

文政五年六月二三日付、北條譲四郎差し出し、茶山当て書簡。本文中に、新居の造営費は金五十両、諸道具外に十両と述べ、当月晦日に移居のつもり…と述べているが、その書簡の追伸に次の重要な記述があるので紹介する。

尚々、先日箱田左太夫特に参り候、尚又昨日も参り候、御徒士の處へ持参金五十両とやらさ候、養子に参り候相談有之、其方へ七八分にて相極め候由、浅草三味線堀（注 榎本家）の由、尚相極り候はば彼人申候は、書通可申上候、彼人口上には太中弟と申名目にて、勘解由へも先達て申込候て、別て此度は太中弟と申様に断、彼も達し候由、もし聞合等御座候はば、親類と違無くと申くれとの事に候、委曲の義は存不申候得共、勿々存候得とも御親類の様にも申出候由にと慥に申候、以上、

（編集部注）

伊能測量隊員・箱田良助は、後の名を榎本円兵衛といい、紹介されたとおり、榎本家の御家人株を買い養子入りしたあと累進して、旗本の御勘定となった。伊能測量に従事して運を拓いた男である。内弟子筆頭として、五島で

落命した副隊長・坂部貞兵衛とならんで忠敬の両翼であった。

円兵衛の次男・釜次郎は後の榎本武揚で、彼の幕末から明治における活躍は皆さんご存じのとおりである。

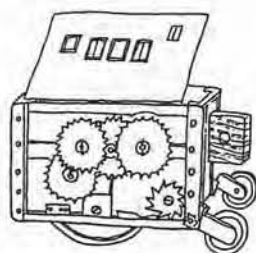
その箱田が測量・製図作業に従事しながら、江戸官界の内情を知る。勘定所系統の役人には能力に応じた出世の道があることが分つて、策を用いて養子に入り込む経過が、四通の手紙に活写されている。我々と身近な人物を通じて、とうじの実情がわかる貴重な史料である。

当代の一流人である菅太中の甥だとか弟と名乗り、霞亭を煩わし、無理をして国許、江戸藩邸に口裏合わせを工作している。忠敬はこのとき、既に死去しているが、届けていないから登場する。榎本側の上役たちも、事情を知りながら形式をいつているのだろう。

二つの史料で榎本が買った徒士の御家人株が五〇両だったことがはっきりする。五〇両持参すれば、微禄の幕臣の養子になれたということである。五〇両というお金は、内弟子隊員の給与（月に二両三分）からみて、九州第一次、第二次測量以降の測量と地図制作などのお手当てから、充分蓄えることができた金額と考えられる。

封建制の厳しい身分制のなかでも、箱田のように有能な者は、庄屋の俸から旗本に昇進する途があったことがわかる。

（渡辺記）



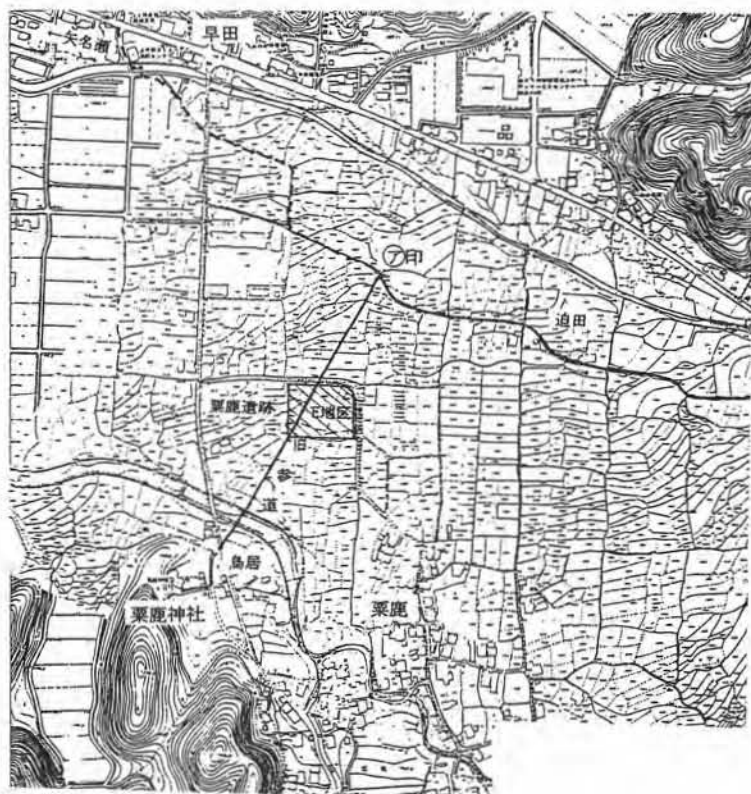
H. Imoh.





伊能隊測量風景の実演

栗鹿神社の参道。斜線は今回発掘された部分を示している。



## 徳山藩測量と平山郡蔵の袴紛失事件（二）

伊藤 栄子

### 忠敬の常備薬

測量方の隊員達は予定通り中ノ関に集つてきた。忠敬にはもともと持病の「おこり」があり、時として発作を起こすことがあった。そのためか測量の旅でも、各地で漢方の薬を煮出す器具はいつも必需品であった。村方の控書に、ある時は薬鍋の事と書かれ、また薬かん（やかん）とも記され用意がされた。

これらから忠敬がつね日頃から漢方薬を服用していたことが分るが、多少医学の心得もあつた忠敬が、健康の維持にと、常備薬として用いていたものであろう。忠敬が使つた具体的な薬の名が記されている珍しい史料がある。赤穂市が収集した伊能測量関連文書のなかの「御廻浦之節諸入用控」の書留めで、徳山測量の前年の一〇月に赤穂近辺の村方によつて記録されたものである。

#### （解説薬名）

##### 金額

##### 目方

- |        |            |                      |
|--------|------------|----------------------|
| 一、壹匁六分 | 山帰来（サンキライ） | 式匁（解毒、利尿等）           |
| 一、壹分   | 木通（モクツウ）   | 同（消炎、利尿、鎮痛、水腫）       |
| 一、六分   | 大黃（ダイオウ）   | 壹匁（便秘、利尿、腹痛等）        |
| 一、三りん  | 忍冬（ニンドウ）   | 同（止血、うがい、やけど、かぶれ、消炎） |

一、壹分五りん 川弓

（ママ）（せんきゅう）

同（補血、強壯、鎮痛）

一、拾もん 陳皮（チンピ）

同（食欲不振、嘔吐、咳等）

一、式分 小せう

（胡椒）（総合薬種）

（注 薬効は現代の書から引用して、あとで書き加えたもの）

以上の漢方薬を村方へ頼んで調えさせている。この処方では病気の特定はできないが、一般に年齢からみて、便秘薬、利尿薬は必須であろう。また忠敬は日頃時々咳き込むようなこともあつたというから、咳剤、ひどい咳のあとの消炎剤も用意されていた。腫みについては、歩くことの多い人は、夕方足の下部が腫れることがあるという。以上は私の古文書研究の友人、薬剤師堀内通子氏の助言である。

頑健な体でもない忠敬が長い旅の間、自分の体の弱点をかばい漢方薬を服用しながら測量を続けていたらしいことが、この一文から察せられる。しかしこの処方と持病の「おこり」との関係はよく分らない。とかく持病というものは、体調のくずれた時、また体力の弱つたころ発作の出る事が多いらしく、その為にも日ごろの養生は欠かせなかつた。

広辞苑によると、「おこり」は一種の熱病のような症状で、古くはワラワヤミといい、間歇的に寒、熱と日を定めておこる病で瘧疾ともいうそうである。

徳山藩の測量中、忠敬は他の班よりも早めに仕事を切り上げて、旅宿に帰っているが、体の不調を予め察知していたのであろうか。徳山藩領のあと、全員が中ノ関へ集合したのは四月二十八日であつた。



中ノ関で隊員達は二日ほど近辺を測量する。忠敬の測量日記には晦日、この日より東河瘧疾と書かれている。(東河は忠敬の号)「おこり」の発作である。このあと忠敬は休養しながら、測量隊の背後からついていくようになる。徳山藩では萩から呼びよせた医師栗山孝庵を忠敬のために遣し、また行く先々の藩でも医師を診察にさし出した。

### 平山郡蔵の手紙

徳山藩には日本海に面した飛地の奈古(なこ)、大井の二村がある。徳山本藩の測量が終えたあと、藩では直ちに次の段取りのために代官原田儀右衛門と、下絵図用意のために御用絵師の朝倉湖内を二村へ出向させた。奈古についた原田儀右衛門の所へ突然下記の通達が届けられる。

#### (解説文)

一、五月十三日奈古出役原田儀右衛門へ書通左之通

測量方御役人平山郡蔵、下関滞留中より継送を以別紙致到来候  
依而御客屋向其外しらべ相成候処、小倉袴之儀以寄候事も無御座、  
依而は其段を以、断之返書差遣候へバ可相濟事ニ相見候へ共、来書  
面兎角此御領迄着用いたし紛込候義と申義も相見、切地(きれじ)  
迄も指越候義ニ付、紛失不自由故之下意も可有之哉ニ相見、然ば奈  
古へ彼者罷越候時は、於徳山一向不相見候のミ之断ニてハ不工合も  
可有之哉ニ付、其元江平山罷越候上、於徳山ハ一向相成不申委敷調  
候へ共、存懸之者も無御座趣、平七又ハ其外之者を以程見御断セ被  
成、左候而ハ御不自由ニ可有之由を以、萩ニて小倉袴地着着御買調  
セニ而被差出、御着用被下度旁其受宜ク申述候様、被仰付可然との  
趣ニ御座候

大意は徳山藩の奈古村出役の代官原田儀右衛門へ書付が届いた。内容は測量方役人平山郡蔵の書状のことで、下関から継送りされてきたものである。それによると、郡蔵の小倉の袴が紛失したという。袴は徳山測量の時までは確かにあったというので、藩では宿泊先の御客室を調べたが一向見当らない。似たような袴を見かけた者も居なかった。その上郡蔵は袴の布地見本までも書状と一緒にさし出している。

郡蔵が奈古へ到着したら、袴は発見できなかった事を、平七などに断らせればよいようなものだが、それでは具合が悪いかもしれないので、萩で小倉袴地を買い、仕立てさせて差し出し、どうぞお使い下さいと申し入れよという指示である。徳山藩の役人松本郡平という者が測量方の世話役をしていたが、平七というのは松本の配下で、測量聞き合わせ係りである。

小倉というのは、九州の小倉で生産された木綿織物のことで、丈夫な生地ではあるが、少々シワになり易く実用品として名が通っている。

また追申として兩人役から、原田儀右衛門へ袴地の代金のことも知らせている。それによると、代金は老両余にも当り、手本地(見本地)の分は二、三步位と記されている。

兩人役とは、蔵本都合役ともいって、藩の計費一切に関する事務を扱う役職で、この地方独特の職名。このあと藩の「御用意記」に平山郡蔵の手紙の写しをそのまま載せられた。次がその全文である。

#### (解説文)

一筆啓上仕候 弥御清栄奉賀候 然ば其御地通行中ハ万端御世話辱  
存候 其刻拙(者おち力)小倉三筋島、赤か、紺といまだ格別ニ古  
くハ無之候袴一具取落置候 尤御上之座敷夜着ふとんのうへニのセ

置候所、御上ニて御着之上夜具類不用ニ付、勝手江引とらせ申候

其節紛込参り候事と奉存候 中ノ関着之上段々相尋候へ共相見へ不申候 尚又下ノ関着逗留中不殘荷物共一々吟味仕候へ共一円相見へ不申、然ば御地迄有之候而着用仕候袴故、多分紛込候やらと奉存候相分り候事ニ御座候ハバ一応御吟味頼上候 其上北海辺へ御出張之節、御左右(たより)可被下候 則同じ切地ニ而仕立申候縞がら遣し申候間、御見合可被下候 新古も此位の品ニ而御座候 大勢之事故相分り不申見へ兼候得ば、随分宣候間御捨置可被下候 袴着用候者給仕人迄ニ而ハ何十人となき御座候事故、誰か彼かと突廻し候ものニ而もなく、主も相分り不申居り候かとも存居候間、一応御尋被下候様ニ申遣候 何分御頼申入候 尚又追々文通を以可得御意候甚多用之中大乱筆御捨忘可被下候 以上

五月十一日

平山郡藏

徳山御領分中御付廻り総代

御役人中様

代官が受取つた通りの内容が読みとれる。そのうえ、少々くどい位の依頼状となっている。「大勢の事故相分り申さず、見え兼候えは随分宣候間、御捨置可被下候」と書いておきながら、北海辺へ御出張の節、其後袴はどうなったか御便りくださいと頼んでいる。本来ならこの依頼は文末に書くべきなのに、中程に特に入れてるのは、よほど気が転倒したのであろうか。

一体この様な書状を忠敬が承知して出させたとは思えないが、徳山領を出立した直後から忠敬は体の不調で、測量隊から少し離れた所で、数日ずつ逗留しながら後からついていった。それでも測量日記は、隊員の報告を受けて、細かく書かれているのは忠敬らしくさすがである。

前回にも書いた通り、測量隊には萩から派遣された横目(目付)が、付添つて近くに宿をとり、測量隊の行動は逐一報告されていたと考えられる。忠敬の「測量日記」にも時に「横目役出る」と見えるから、横目が忠敬の御機嫌を伺いながら、様子を見にきていたのが分る。

郡藏の袴がどうして紛失したか、この手紙の中だけでは詳細は分らない。郡藏のいうように、大勢の中で袴をはくのは給仕人まで合わせれば何十人もいて、この中で紛れたというけれど、村方の手伝い人の中でその様な事が起ることは考えにくい。

測量隊は徳山地方にきて接待を受けたが、これ程の人数を動員する大作業は、減多に起こることではない。したがって服装も各自が持ち合わせていなかったであろう。まして給仕人など俄仕立てで子供を使っているから、袴など持つてはいない。あちこちから借りるか、損料(借用料)を払つて都合したらしい。

御用意記の中には此度の用意は、すべて巡見使の時に準じて行うようにと書かれている。しかし巡見使は將軍の代替わりの時しか来ないのだから、役人以外多数の村方の者が袴を持っていたとは思えない。つまり身につけた袴の外、代りの袴など無いのだから、紛れようはないのではないか。また当時の刑罰の厳しさはよく知られているし、古着の流通市場で袴が出て、常に必要のない物に買手はつかない。ではどうして袴は紛失したのか。この件は郡藏にとつても、後味の悪いものだった筈である。

徳山藩の御用意記には袴の事以外は郡藏について記されていないが、その頃の長州や防州での郡藏の行動が幕府の知る所となり、領曆所(曆局)から忠敬は戒告を受けることになった。

その内容は、大谷亮吉著の「伊能忠敬」によれば、

西国筋測量御用の節

伊能勘解由弟子

平山郡蔵

一、常々賄方の差出した料理に文句をつけていたが、特に長州阿武郡奈古村泊りの時、出された料理を食べないので、賄方が再度作り直してさし出したところ又も注文をつけ、他の弟子に差し留められた。

一、所々で買物をした折、いつも価格を値切って支払っていた。

一、長州萩で島々へ渡船の用意に手間どったのを怒り、たばこの箱を投げつけた。

一、防州辺で、屏風（びょうぶ）に張ってあった品を無理に所望したり、書画を懇望した。

これらは文化三年十二月十五日、暦局の高橋景保からの申渡書の理由である。このため忠敬は監督不行届として御叱りを受け、内弟子郡蔵と小坂寛平（寛平は別の件により）の二人は忠敬から破門されることになった。二人が隊から追放されたのは、隊員間の不和が一大原因であったと記されている。これは第五次測量が終わり、一行が江戸へ帰ってからのことであつた。

奈古村、大井村の測量

測量隊一行は日本海沿岸に向う。徳山の飛地の二村は萩のすぐ北方にある。沿岸を測量しながら赤間関（下関）を廻り、先ず萩に到着。余談であるが、赤間関のある長府藩では狩野派二家の絵師を抱えていたが、ここでも絵師は伊能測量に関らなかった。

奈古、大井、両村では測量に必要な諸道具の内、徳山からは必要最小限の物が運ばれ、その他の地元で調達できない物はすべて萩の本藩から借用した。また測量用の船についても、原田儀衛右門からの依頼

により、萩の御蔵元では十艘程も手当したが、漕船も数艘必要な旨、付廻りの手子から申し出があつた。十五艘差し送るから受取るようにと、両人役からの返書がある。

二村の海辺は瀬戸内に比べ島数は少いが、時に日本海の風波は荒い。六月朔日は晴天で測量隊は萩の浜崎町を出立、高橋、稻生、尾形、宗兵衛らが虎崎から大井浦をへて、湊浦まで測る。この辺りから徳山領の大井村となる。大井村は大井川の南を前大井といつて萩領、北側を先大井といい徳山領になつてゐる。湊浦はこの辺の魚業の中心地。

もう一手は大井村明神下より、海辺鶴山廻りさ、子、磯ひら奈古浦まで測り、昼食後奈古浦より筒尾迄終る。夕七時半には帰宿。

六月二日晴天 朝供揃いで出立し、乗船したのは忠敬、門倉、平山の三人で角次、吉平が付添つた。三人は病気で宇田へ直行。宇田浦は石州街道に沿つていて萩領である。

他の隊員も奈古村出立、一番手が萩領木与村境から宇田村旅宿下迄測る。二番手は前の浜より山越えして木与村に至り、一番の測量地へ繋ぎ、それより逆に戻つて奈古村の三番手と合う。隊員達はよく連携をとり当地の測量は終つた。この日は風波が強く海も荒れていたが、一行は畔（くろ）頭庄右衛門宅で昼食の後、沖手にある萩領の野島へ向つた。

参考文献

- \* 伊能忠敬測量日記 第二巻（大空社）佐久間達夫校訂
- \* 徳山毛利家文書（御用意記） 山口県立文書館蔵
- \* 漢方実用大辞典（学習研究社）
- \* 山口県の地名 日本歴史地名大系36（平凡社）
- \* 測量御役人中様御廻浦之節諸入用控 坂越浦

（管理者 赤穂市坂越 大避（おおさけ）神社）

## 忠敬青春の地に記念碑三本を建立

海保 英之

伊能忠敬全国測量開始二百周年を迎え、改めて忠敬の人物や業績等について、様々な角度からの研究がすすめられるとともに、各地で忠敬にちなんだイベントが行われるなど、日本中が忠敬ブームに沸いた。なかでも世紀の壮舉ともいえる伊能ウオーク隊の行く所全国各地で大歓迎を受けるとともに、忠敬再評価の動きをもたらした。

これは、伊能忠敬が少年時代を過ごした横芝町（千葉県山武郡横芝町）においても同様で、忠敬については、一般の方には佐原時代以降を除けば九十九里町（千葉県山武郡九十九里町）で生まれたことが知られているくらいである。横芝町は、忠敬の父親・神保貞恒の出生地であり、忠敬自身も人格形成のために最も重要な少年期を横芝町で過ごしたにもかかわらず、文献等が少なく大半が伝承であることなどから、今ひとつ認識に欠けるような状況が続いて来た。

一口で言えば、忠敬の生涯から、多感な成長期がすっぱり抜け落ちてしまっているようなものである。

しかし、ウオーク隊の来訪等により伊能忠敬に対する関心が大いに高まり、忠敬の人物や業績、横芝町とのかかわりについて再認識されるところに、新たな発見も行われた。

そこで、今回の全国測量開始二百周年に当り、横芝町が伊能忠敬ゆかりの地であることをひろく知らしめるとともに後世に伝えるため、

特にかかわりの深い場所を三箇所選定し、平成十一年九月に町で記念碑を建立された。

記念碑は白御影石で、高さ一・五メートル、幅三十センチ、表にはゆかりの場所である旨を記し、裏には建立年月日が刻まれている。

なお、宿泊場所については、忠敬の天体観測により確定された屋形浜の緯度等も裏面に刻まれている。

### 記念碑一「伊能忠敬成長の処」

場所 千葉県山武郡横芝町小堤 神保 誠家 門前

伊能忠敬が少年時代を過ごした神保家は、戦国時代から続く旧家で、祖先の神保長門守は、近くの城山と呼ばれる丘陵に、今も城跡が残る



坂田城の家老であったと伝えられている。帰農後は、造酒家もいとなみながら、代々小堤村の名主を務めた名家であり、小関村の小関五郎





左衛門家、佐原の伊能家とともに、忠敬を語る上で欠くことのできない家である。

本誌連載で、小島一仁氏解説の『佐原伊能家文書』の婿探しのくだりに、婿候補として「武射郡坂田郷小堤村神保三次郎」という記録があるが、この小堤村が、現在の横芝町小堤であり、神保家は、今の神保誠家である。この頃忠敬は神保三次郎と呼ばれ、父の生家である小堤村の名主神保家を中心に暮らしていた。

伊能忠敬の父神保貞恒もここで生まれ成長し、小関村（千葉県山武郡九十九里町小関）の名主・小関五郎左衛門家に婿養子入りをした。

小関村では二男一女に恵まれたが、やがて妻のミネと死別し、当時六歳の三次郎（忠敬）については、一〇歳になったら迎えに来る旨の

約束をして小関村に残し、兄の貞詮と姉・房の二人を連れて小堤村の神保家に帰り、以降、父も兄も生涯を小堤村で過ごしている。

やがて三次郎も一〇歳になると小堤村の父の元に引き取られ、親子四人で神保家の人々と暮らしたと伝えられる。

小堤村の父の元に帰った三次郎は、一七歳になるまで神保家や小堤村の人々の温かい人情と豊かな自然の下で成長し、その後、従兄に当る神保家の利八に送られて、佐原村の伊能家に婿養子入りした。

家屋等は建て替えられ、当時を偲ぶ建物等は残っていないが、このような神保家の地理的、経済的環境は、忠敬の青少年時代を考えるうえで重要な場所の一つである。

## 記念碑二 「伊能忠敬父 神保貞恒生活の処」

場所 千葉県山武郡横芝町小堤 神保 新家 門前

伊能忠敬の父神保貞恒は、妻と死別後生まれ育った故郷の小堤村の神保家に帰り、貞詮、房、三次郎とともに暮らしていたが、その後近隣の板川村（千葉県山武郡山武町板川）から新たに妻を迎え、やがて神保家のすぐ近くの丘陵の麓に分家し、ここで生涯を過ごした。

分家してできた家が、現在の神保新家で、余談だが、当主の神保新氏は、肖像画などに見る伊能忠敬に大変よく似ているように思われる。

神保新家には古い仏像が一体、伝えられてきたが、最近胎内から貞恒の書付けが発見された。これによると、明和五年、貞恒が五九歳の時に信州の善光寺に参詣し、亡き忠敬の実母・ミネの菩提を弔うために買い求めたものであるという。

九十九里から離縁にはなったが、土地の仕来りによるもので、夫婦



仲はよく、分家後も小関家と何らかの経済交流があったことが偲ばれる。

### 記念碑三「伊能忠敬宿泊地・観測地」

場所 千葉県山武郡横芝町屋形荒場

海保兵右衛門家（屋号東隠居）跡



この場所は、伊能忠敬が全国測量の際に宿泊し、天測をおこなった場所である。この観測により町の位置が初めて確定したもので、横芝町にとつては、大変意義深い場所である。

海保兵右衛門家は、九十九里海岸のほぼ中央に位置する屋形海岸から北へ約二キロ程の所に居を構えていたが断絶し、屋敷跡の一部がわずかに残るのみで、当時の面影はない。

伊能測量隊が第二次測量の途中に訪れた当時は、網元として、また九十九里一帯の大名主として隆盛を誇っていた頃であり、名主であり、神保家とも親戚であることから、測量隊の宿泊場所になったものと思われる。

忠敬は享和元年（1801年）七月一六日の午前中に海保兵右衛門家に到着し、その後小堤村に向いて父の墓参りをしている。午後五時頃には戻ってここに宿泊し、夜は天体観測を行った。屋形村（横芝町屋形浜）の観測値は北緯三五度三六分半であった。

### 講演会「伊能忠敬物語」を開催

講師 会員・渡部健三氏 一関市にて

去る十一月六日、一関市山目公民館にて市立図書館主催で読書週間関連行事として開催された。当日は「日本を測った男・伊能忠敬と伊能ウオーク写真展」と併せ、二時間講演。渡部氏は忠敬の人生と測量、地図について話された。特に岩手県における第一次、第二次での伊能測量隊の行動記録や「伊能忠敬日記」での一関付近のようを詳しく、資料にもとづき紹介された。（連絡〃伊能ウオーク隊・小野寺誠さん）

なお、渡部氏は伊能測量二百年を記念して、六月に仙台での法務局職員研修会、七月に岩手県文化財愛護協会の郷土史学習会、十一月には前記のほか地元盛岡市や大槌町、北上市などで伊能測量を中心とした講演活動を熱心に行っておられます。

## 伊能忠敬史蹟めぐり 4

伊能忠敬三陸沿岸測量二〇〇周年記念

### 「海上引縄測量の地」記念碑完成

渡部 健三

伊能忠敬が三陸沿岸を測量して二〇〇年を記念する石碑の建立式典が一〇月一〇日、岩手県釜石市唐丹町（とうにちよう）大石の出河岸で行われ、関係者は、忠敬ゆかりの郷土史伝承の熱い気持を、あらためて囃みしました。建立したのは地元有志でつくる伊能忠敬測量二〇〇周年記念釜石地区実行委員会（金沢二郎委員長）です。

記念碑は黒御影石製。高さは三、三五メートル（台座を含む）で、上部に直径六〇センチの地球儀を載せています。制作にあたって、今春以降、市民から約一八〇万円の募金を集め、国、県、市から計一五〇万円の補助金を得ました。

記念碑の正面には

### 「伊能忠敬海上引縄測量之地」

また、側面には

「享和元年（一八〇一年）全国測量中の伊能忠敬は、陰暦九月二三日当地に至り、ここ大石出河岸を基点に、海上引縄を以て真北の対岸仏ヶ崎まで測量した。翌二四日夜、本郷に於いて緯度を観測、『北極出地三九度一二分』とした。古老の口碑並びに調査の結果としてこの碑を建立した。」

との碑文が刻まれています。



（釜石市唐丹町・伊藤要太氏撮影）



### 唐丹湾での海上引縄測量

『伊能忠敬測量日記』によれば、第二次測量（本州東海岸・奥州街道）では、伊豆半島でもそうでしたが、塩釜湾岸以北では、連日のように舟を出して引縄測量に頼らなくてはなりませんでした。

とくに太平洋に面した南三陸リアス海岸は、数多くの湾入と岬がつづく地形で、岬に通じる道路に乏しいことから、測量隊は陸上班と海

上班に手分けしながら北上したのはご承知のところですが。

なかでも、九月三日（太陽暦では一〇月三〇日）の日記には

「（前略）我等、宗平、慶助は六ツ後に立。吉浜村、唐丹村、唐丹

村の内、大石浜より舟にて引縄測る。是を終とす。七ツ頃着。止宿

西村善太郎（以下略）」

と、海上測量の基点が大石浜であることが明記されているため、その地点の特定が比較的容易なことから、伊能中図にも唐丹湾を横切る朱線が仙ヶ崎と結ばれているのが特徴です。

『伊能忠敬の科学的業績』の著者保柳博士は、難読をきわめた海上測量のことを同書で紹介し、伊能中図（唐丹湾付近の部分図）を例示されています。（五三ページ）

第二次測量では、唐丹が最後の海上測量地となりました。なお、仙ヶ崎の北側の奥には本郷の集落があります。ここは旧仙台藩領北端の番所が置かれていたことで知られていますが、地元「葛西昌丕（かさい・まさひろ）」という天文暦学者がいて、伊能隊来村から十三年後の文化十一年（一八一四年）、伊能忠敬を顕彰した「測量之碑」ならびに「星座石」と称するものを自費で建立しました。時に昌丕四十九歳。忠敬六十九歳の秋のことです。

地元の人の心情として、「昌丕は忠敬に面接していたことが事実であってほしい」とねがっているのですが、確証が得られないため不安を隠しきれません。わたしはそのつど、「測量之碑の碑文を見れば、二人が会見していることは明らかで、むしろ、それを否定する証拠を探すほうが難しい」と答えて人びとをなだめることにしています。

忠敬顕彰碑のうち最古の「測量之碑」と、建立したての「海上引縄測量之碑」は、波静かな唐丹湾をはさんで、互いに向かい合っているのです。

## 源空寺に忠敬墓は二基あった

永野達代

辛いめあかし家業から足を洗ったつもりが伊能さんに「さすがは女めあかしだ」とおだてられてお調子者はまた走り回ってしまった。事件の発端はこの本との出会いである。引写してみる。

上村瑛著『江戸文人戒名帳』原書房 昭和五七年刊

### 伊能忠敬 有功院成裕種徳居士

全日本沿海実測全国を完成した伊能忠敬（延享二年・一七四五〜文政一年・一八一八）の墓碑は、史跡として台東区東上野六丁目、五台山文珠院源空寺・浄土宗にある。大正十二年（一九二三）の関東大震災の頃は、浅草区北清島町と言った。震災後、この付近は区画整理となり、伊能忠敬の墓碑あたりが道路にかかるらしく、広い墓地全域の大部分が改葬工事が行われて大変であった。史跡に指定される程の人の墓が五、六基あって、そう言う歴史上の人の墓を移す時は、土壌を掘って中の遺骨がどのような方法や形式で葬られているかを調査するらしく、文化財担当の役人や歴史学者が立会って工事にかかっていた。ちようどその日は伊能忠敬の墓を掘り起していた。あいにく朝から曇り空が雨となり、その上、深く掘り下げる忠敬の墓地からも水が湧き、三、四人の工事人は泥水の中で大声をかけ合いながら難渋している様子であった。どうして私一人が、偶然その場に出会ったものか、

今、考えてみてもいっこうにその事が判らない。まだ中学生であったから、わざわざこの日を知って検分に来るなどと言うこともない筈である。とにかく見物人は私一人で、工事関係の人は六、七人であった。忠敬が日本で初めて実測日本地図を作った偉い人であることと、頭蓋骨が日本人では一番大きく重いと言うことは、在学中に担当の先生から聞いて知っていた。そんな程度の知識しかなかったが、その大きな頭が出てくるかの方に、私の興味はあった。掘り起こしている忠敬の墓は、台石をふくめて、高さはせいぜい四尺（約一二〇センチ）にも足りない貧弱なものであった。そんな生で見たこの墓の記憶と、現在、源空寺にある墓と、どうも様子が違うように思われたので、これは後日、住職に聞いた話だが、二つ墓があったとの事である。すると生で見た小さい墓から遺骨がでて、大きい方の墓を移葬した場所に建てたと言うことになる。掘り起こしているうちに、墓に似合わせぬ埋葬で、形式は大名並だと、話し合っている声を聞いた。まるで古代の遺跡を発掘調査している、と言った興味が湧いてくる。しばらくすると、泥の水が真っ赤な色の水に変わって来た。それを、子供ごろに血とばかり思っていると、朱と言うもので、死体を腐らせない為のものとあり、これは大名でないと朱に埋めると言うことはないのだ。と、学者らしい人の声が聞こえて、私はそれが判った。木櫃は適度の湧水のためか、そう朽ちてはいない。ところが、死骸の状態がどうであったか、大きな頭蓋骨がどうだったか、と言う記憶が全くないのである。長じて、伊能忠敬の肖像画をみて、成程、頭が異常に大きいと言うことを確かめた。

#### 中略

この源空寺墓地に、伊能忠敬、高橋至時、谷文晁、幡随院長兵衛など、指定史跡を一列に並べたのは、訪れる人の利便を考えて合理的に

展墓したように思われがちだが、これはそうではなく、指定されていなかった大震災前でも、自然の成り行きで墓は近くに並び、上野の山に向けて西面していた。その並びの先に熊谷直実法蓮坊入道の大きな供養墓や松葉町寄りに、これも目立って大きい渡辺華山の顕彰撰文碑があったと思うのだが、この碑の方は寺でも、あったかどうか、五十余年前の当時のことは判らないとの事であった。

### 専門家は凄い！

大名並とはえらいことになった。その時の調査記録がどこにある筈である。

文化庁に紹介された都教育庁文化課文化財保護係の亀田駿一氏に電話で伺うと、残念ながら調査記録はなかったが、掃苔録、東京府史跡調査報告第七冊名家墓所、上原久著「高橋景保の研究」第三章などを教えてくださった。氏は文化財の専門家とはいえないへん話題豊富な方で話は尽きなかったが、忠敬さんに関係することをひとつご披露すると、佐藤一斎の墓は六本木交差点近くの深広寺にあり、戦災復興道路整備で墓は改葬され、形式は甕棺墓だったとのことである。

そして亀田氏は大名墓の研究をしていらつしやる港区立港郷土資料館の松本健氏をご紹介くださった。氏によれば

- ・墓石と埋葬形式がアンバランスということは考えられない。
  - ・何をもって「形式は大名並」であるとしているのかわからない。
  - ・大名の墓で朱をもちいた実例はない。
  - ・將軍家の墓からは数基朱の反応がでているものがある。
- 赤い水は絵の具が溶け出したのではないかということだった。
- 古美術の専門家浅井さんに御意見を伺ってみた。「なんとも言えな

い」という慎重なご返事だったが、遺族や地図制作関係者等が墨と絵の具あるいは朱墨を副葬する光景はとてもリアルである。

松本氏のお考えに決めてしまおう。【反論は受け付けます】大名並という話は消えた。考えてみれば小さい墓の方に遺骨があったということは喪を伏せていた時の埋葬であるから、立派なものが作れる訳がないのである。

改葬工事は昭和三年完了する。左の写真から、この時、掘返した墓のあとに二基の石灯籠が据えられたことがわかる。左は佐藤一斎墓碑

昭和五年刊 東京府史跡調査報告第七冊名家墓所より







墓碑  
(右、伊能忠敬、左、高橋至時)

### 証拠写真があった！

やはりお墓は二基あった。大谷亮吉著『伊能忠敬』の口絵にその貴重な写真が載っていた。この本の発行が大正六年、したがって関東大震災以前の撮影とすることがはつきりしているので、真中の小さいお墓が上村少年が目にした忠敬墓と考えてよいであろう。忠敬さんは亡くなってからずっとこの仮の墓の下に眠っているのである。なぜ本当の墓が造られた時に遺骸を移さなかったのであろうか。

ご住職が上村氏に二つ墓があったと話しておられるからその事は代々伝えられてきたことになる。

源空寺は遺骨がない墓に立派な柵をもうけているし『伊能忠敬』の執筆者達はどこに忠敬さんが葬られているか説明をうけなかったようだ。寺は偉人にはこちらの方がふさわしいと考えたのだろうか。

『江戸文人戒名帳』のほか次号でバクする予定の『高橋景保の研究』にも「墓域の中央には早くから伊能忠敬・高橋至時・蟠随院長兵衛・谷文晁・翠蘭夫人等の墓があり、この一廓は最もよく整っていたので、これを中心に墓域を縮小した」とあるからここは改葬の必要がなかった。工事人が入った機会をとらえて忠敬墓を整えたのだろうか。いずれにしろ、お骨が入るべき墓に納まってご住職もほっとされたことであろう。もしこのこの事がなかったら我々はからっぽのお墓に手をあわせていたのである。しかしこの写真で見ると、墓石は傾き花入れすらなく、まことに侘びしいかぎりである。

まだまだお墓の話は続きます。次号は「源空寺に景保墓は二基あった！」です。乞御期待？

## ドキュメント・伊能忠敬像建立

二〇〇〇年一月中旬

深川の富岡八幡宮に、一月二日の伊能ウオーク完歩御礼参りの打ち合わせ。(JWA・木谷専務、伊能研・渡辺、朝日・岩城、JWA近藤) 打ち合わせの席上で何か記念のミニメントを境内に、という話合いが行われ、伊能忠敬銅像という考えもあるが、という意見が出る。前向きのお返事をいただいたが、銅像建立の現実的な計画があるわけではないので、具体案を研究することになる。

一月一八日

彫刻家に知合いもないので、伊能洋さんに相談。彫刻家・酒井道久氏を紹介され、概略の費用がわかる。

一月一九日―二〇日

実現の可能性が出てきたので、西郷隆盛、大村益次郎、楠正成など著名銅像を参観。規模、募金可能額などの見通しを立て、第一次素案を作り、JWA木谷専務と協議する。

基準となったのは、伊能忠敬研究会としての募金可能額だった。会員有志にお願いしたときの可能額を一〇〇万とし、ウオーキング協会なら三〇〇万、測量グループ五〇〇万、土地家屋さん五〇〇万と期待値を積み重ねると見込み額が見えてきた。

事務局はウオーキング協会、会長は全国測量設計業協会という案をまとめてみた。木谷専務が難色。銅像となると、伊能ウオーク記念だけではなく、伊能測量二〇〇年記念であって、ウオーキング協会が事務局を務めるのはふさわしくないという。

ここが一番、測量グループに中心になって頂くべきであると一致。

二月二六日

木谷、渡辺で、関東地方測量部長の堀野さんを訪問。銅像建立素案を説明。測量グループが旗頭になってくれるよう依頼する。具体的な数字もついている話なので、前向きに検討いただくことになる。

二月二七日

木谷、渡辺、富岡八幡宮・櫻井権宮司を訪問。銅像建立の希望を申し入れる。「そういう希望はいろいろある。境内は広いようで狭い。どのくらいの大きさの、どんなものを考えているかを伺わないと、場所はきめられない」とのお話だった。

午後、早速、伊能さんを訪問。大きさ、構図を一月一五日までに提案いただくようお願いする。(伊能洋・陽子、酒井さん等はこれから、八幡宮境内などを調査して、イメージをかため、ラフ・デッサンをまとめてくれた)

二月二八日

国土地理院で星埜参事官と堀野部長協議。地理院として応援していただくことが固まる。一月以降、関係団体に国土地理院で協力依頼していただけることになる。

一月一五日

ラフ・デッサン受領。関係者に送付。日本土地家屋調査士会松岡広報部長にも動きを伝える。参加希望をいただく。

一月二五日

全国測量設計業協会連合会は、会員各団体に協力要請をおこなう。

二月二日

関東地方測量部で銅像建立実行委員会準備会を開催する。参加者は左のとおりであった。

(国土地理院) 星埜参事官、堀野関東地方測量部長

除幕式冒頭、経過報告をする渡辺代表理事。後列は左より八幡宮  
宮司、国土地理院長、中川会長。右側は数矢小の音楽クラブ。



(全国測量設計業協会連合会) 上原専務理事

(日本土地家屋調査士会連合会) 松岡常任理事・広報部長

(日本測量協会) 島崎理事・事務局長

(日本地図センター) 鶴見常務理事

(日本ウオーキング協会) 木谷専務理事

(伊能忠敬研究会) 渡辺代表理事

この席で、計画の推進を決定、役員は会長を日本測量協会会長に、事務局を日本ウオーキング協会に、事務局長を伊能研代表理事に委嘱し、星埜参事官、堀野部長はオブザーバとして参加することを内定する。

二月二十四日

富岡八幡宮に櫻井権宮司訪問。銅像建立の内諾をいただく。場所は  
大鳥居脇を強く希望する。

二月二十六日

第二回準備会開催(関東地方測量部)。星埜氏を除く全員出席。計画  
概要、会則、役員など実行委員会への提案内容を内定。募金の目安を  
二千万円とし、第一回実行委員会を三月一五日に開くことを決定。

二月二十八日

富岡八幡宮より大鳥居脇に建立OKのお返事をいただく。

三月七日

朝日「東京版」に記事掲載。読売は三月一四日「江東版」掲載。

三月一五日

実行委員会当日。開催に先立って櫻井権宮司立会いで、銅像と併置  
する三角点の設置場所の仮杭を打つ。関東地方測量部測量課長立会い。  
会長挨拶。準備会の提案を了承。実行委員会成立する。伊能図を背  
にしたデザイン了承。表面の文字決定。裏面の寄付者芳名の文字は検  
討課題。趣意書文案決定。JWAでパンフ発注を予定。完成次第、募

金開始を決めた。メンバー皆やる気になる。

実務の執行については幹事会に一任される。歌仙茶屋にて五千円会費で懇親会。読売新聞の取材もある。朝日新聞は寄付金を三月末に入金することになる。

四月二十四日

関東地方測量部で、併置する三角点モニュメントの発注打ち合わせ。銅像制作者の酒井氏が一括引き受けることになる。

五月二三日

第二回幹事会。宮司が富岡興永さんに交代となる。佐原中学出身ということで、忠敬に大変理解がある。石膏のミニチュア試作完成、承認。裏面の御芳名の刻字原則を決める。九月四日地鎮祭、除幕式は一月二二日に決定。(のちに、都合で一月二〇日に変更)

六月五日

酒井氏と事務局長の間で契約覚書交換。銅像と付帯一式の請負額を、消費税込み一四〇〇万とする。瑕疵担保期間は五年間。完成後は神社に寄贈するので、維持責任と瑕疵担保期間を明らかにするため、三者間の覚書も作成した。

六月一四日

読売新聞、江東支局開設五〇周年記念として、百万円の寄付決定。

七月一日

第三回幹事会。粘土像制作報告。銅像募金一六〇〇万に達する。あと一息。月星化成さんの寄付決定。忠敬ゆかりの地佐原・横芝・九十九里にも声をかけることをきめる。渡辺、堀野で後日、訪問要請して百万円寄付が実現した。

七月一五日

渡辺、伊能、酒井氏のアトリエを訪問。修正意見などを提出する。

伊能洋氏はさらに、八月一〇日に訪問し鑄造前の最終確認をした。

九月四日

第四回幹事会開催。募金額一九〇万余となり、ほぼ、目標達成を確認。表面の刻字を「伊能忠敬先生像」から「伊能忠敬像」に変更。裏面の寄付者芳名について刻字内容を決定。

除幕式次第、招待者リスト、祝賀パーティ次第、報道計画などを決定。加藤剛、賀来千香子氏ら、映画出演の扮装で除幕式に参加することが決まる。神社より除幕式に鏡割りの樽酒を御寄付いただく。

一時より全員出席して櫻井権宮司が斎主となって地鎮祭を執行。宮司・富岡興永、監修者・伊能洋、制作者・酒井道久の各氏と、最後に一同を代表し建立委員会事務局長の渡辺が鍬入れをおこなった。二時から神社の馳走で昼食会が行われた。

九月五日

確定した刻字の内容を彫刻家に送る。式次第など修正案を関係者へ。

九月一八日

除幕式当日の細部打合せ行われる。

一〇月一六日

銅像据付おわる。

一〇月一七日

一四時、銅像前で報道発表。共同通信、朝日、読売、毎日、東京、北海道、NTV、文京区広報、等参加。翌日の朝刊紙面に大きく報道。

一〇月二〇日

九時三〇分第二回実行委員会兼第五回幹事会。募金内容個別明細を報告。基金使用計画を承認。除幕式の式次第等を説明する。

(渡辺 一郎)

地域史料

対馬藩宗家文庫『測量御用記録』(四)

入江 正利

編集部注

先号では、対馬藩の『測量御用記録』のなかに、伊能隊に対し「これだけの地図があるのだから、測量をやめてもらえないでしょうか」という陳情記録があつてびっくりした。

忠敬は、天測をやっていないからと押し通すのですが、朝鮮と日本の間にあつて、交渉力で藩を支えてきた宗家は、すべてをかしこまつてお受けする他藩とは少し違うことがよくわかった。

前後の記録を、編集委員の伊藤栄子さんによく読んでいただいて納得したが、このテーマは項をあらためて取り上げることにして、とりあえず、入江レポートを完結させることとする。長文なので、これまでに既知の事柄は割愛し、新事実を中心に整理をさせていただいた。

本稿に釜石と同じ海中引き縄が登場する。一読を乞う。(渡辺)

三月一日は晴天で西の風。四つ頃に嶽の辻へおいで下さいとの知らせを受けて出かけ、巳の刻に坂部一行が到着する。霞が立ち始めていたが直ぐに遠測を始めた。

手引きの者に島の名や山の名を尋ね、坂部・尾形等観測係りの三人が方角を測り、その数字を記録係りの内弟子に伝えて書き留めてゆく。同じ方位を測るのだが、読み上げる数値は観測者によりそれぞれ違つていた。それをそのまま書くという。これは遠方の目標の方位を測つ

たもので、何人かで測つて平均を取つたという実景が裏付けられている。

そして午中刻頃に、郷左衛門は郷之浦を出船し、浦々へ寄りながら翌十六日の巳刻に対馬の南室浦へ着船。ただちに御郡奉行所へ報告に出る。

ここまでが五冊の文書内の沓番の内容で、沓岐へ渡船してから帰国する迄の対馬藩上役との間の御用書留の部分がまとめられている。最初は沓番(つまり二冊目)としていたが、沓番の後ろへ附録として付け加えられることになった。

この手紙のやりとりの中にも興味深い部分がいくつか記録されているので紹介する。まず、形どおり作業は二隊に分かれておこない、それぞれの隊員の身分、名前が列挙されているが、最後に身分についての注記がある。

付記

内弟子三人皆々御家人衆二而為稽古被相附候得は、佐嘉二而次御本陣と相唱、内分二而少し丁寧之振り二有之候、就中尾形謙次郎二は拔群之人二而、測量方坂部氏・も却而功者之模様二相見候、佐嘉二而は此人江諸般示談有之候由

内弟子三人は御家人で稽古のためついて歩いており、佐賀では次本陣といい、内分で丁寧にとりあつたという。なかでも、尾形謙次郎は拔群な人で、測量の実力は副隊長の坂部より上のように見えました。佐賀ではすべてこの人と相談してことを運んだとのことである。



内弟子は御家人ではないが、御家人である同心に準じた待遇を受けたから、地元の認識も誤りではない。尾形の株が高いが、忠敬の書簡に、坂部が死没後、その仕事を尾形にやらせたとあるし、忠敬の命で、伊能式測量法を記した『伊能東河先生流量地伝習録』を著わしてもいいから納得がゆく。尾形の仕事を立証する記録である。

つぎが測量の日程計画である。各地の事実はたくさん分かっているが、予定を書いた史料は少ないので記しておく。

- 一日二式里遠して三里程充ニ<sup>レ</sup>止宿ニ相成候由之事  
附り、旅宿間取之儀、御一手二五ツ間充之事  
但、雨天之節ハ逗留有之

測量の速さは一日に二里から三里で止宿する。宿は一隊につき五部屋必要です。雨のときは逗留します。

- 一朝出立正七ツ半時頃より明六ツ時迄之内ニ而、  
泊江は昼九ツ頃着、其上絵図 取立等有之候由之事

朝の出発は、夜明け一時間前の七ツ半から夜明けの六ツ時までの間で、宿舎到着は正午ころ。そのあとは地図の作業などに従事する。

遅くとも夜明けとともに作業を開始する明記してある。伊能隊は早立ちと早着きを徹底して昼には宿舎に入った。

- 一 朝夕料理之儀、出着は格別其外ハ  
香物入一汁五菜程ニ而相整候由

酒は差出候而も用ひ無之由之事

食事は領内へ到着したときの歓迎と、終了して他領へ出立の送別の場合は特別だが、普段は香の物を含めて一汁五菜とのことである。酒は出しても飲まない。(表向き禁酒だった)

- 一 人馬之儀旅宿へ持送用馬五六疋程充、人足四拾人程充入用有之候由之事

道筋通切ニ相付候人足六拾人程之由 但、本文人足之儀、前以致候様等見習居候半而ハ、御用不相弁由ニ而 御順之入込之前日、前々日ニ而も 取役・連越見習候様之事

人馬は一隊につき、荷物持ち送り用に馬五・六匹、人足四〇人程用意する。測量のため一日通しで使う人足は六〇人くらい。しかし、これは前日あるいは前々日から見習っておかないと役にたたない、となかなか注文が厳しい。

- 一 ぼんでん之儀、一手二式拾本程ツ、御領々ニ而 用意ニ相成候由、拵様は三四寸廻之直 成竹、式間老尺二切、頭ニ葛芋又ハ角取紙間結付置候由之事

- 一 道引之儀、大庄屋扱又村々庄屋・五人程通切ニ相附候様之事  
右は前日泊之場所へ釣合前夜より詰切居候由之事  
一 付副之人々下役兩人程充相附居候様之事

つぎは梵天の仕様である。一手に二〇本用意する。三・四寸周りの真直ぐな竹を二間一尺に切り、頭に葛芋または角取紙を結びつける。

道案内の庄屋は五人ほど付き添い、これらは前夜から宿に泊り込んでいること。付き添いの下役も二人くらい連れて出ること。梵天は色々な寸法があつて、長いところでは三間と指定しているが、ここでは二間である。頭につけるものについてはよく分からない。

つぎは音物である。あけすけな記事ですが、あとの史料に関係があるので、事前調査の情報として掲げる。

# 一 音物等之儀

御領主方より御国産之品等被進候は受用有之候由候得共

御役人中口之音物等は受用無之由候事

## 附札

御使者御音物之儀ハ、帰府之上御届方有之事と相聞候得は

金子と申候而ハ決而受納無之 国産之品は受納有之候、尤何方

二而歟 尊有之候は多年諸国徘徊納之事ニ候得は、国産之御音物迎も半々品積り候而ハ人馬之運送手入ニ有之、夫とて宿主等

二相與候杯は御領主ニ対し不敬之段恐入候得は、是等内分甚困り入候と之事ニ相聞候、就右佐賀方ニ而ハ 御使者前手筋之者

心得を以 御音物之品急ニ相調不申など役人江断申入、料物差出置キ 例之通御使者勤有之候由相聞候 以下々々ニも菓子等

被差出候節も 右之振合を以取斗有之候由

音物の品物は取ってもらえるが、お金は受け取らない。諸国名産といつても国々を回っているの、たまつて運送が大変である。そうかといつて、宿主人にくれたりすると、送り主に申し訳ない。内分では測量隊も困っているようである。佐賀では調達が間に合わなかつたなどといつて、代金を置いて使者の勤めを果たしたとかいうことである、

という。

こう書かれると、九州東海岸あたりで音物をすぐ換金していたのは合理的であると思う。この地区にはそのような非公式情報は流れていなかったようである。

ついで、三番の測量御用記録に移る。

文化十年癸酉 五冊之内三番 測量御用記録

三月二十八日御役人衆御国着船・東西海辺測量相済、五島江送届候迄之日記也

東組伊能勘解由殿江中村郷左衛門相附候分并 西組之日記も此帳之末ニ相添置

未刻過ぎに測量衆の船が見えたとの貝吹きのお知らせで、佐治勝左衛門、中村郷左衛門以下係りの役々は紗上下を着用、下役・町役・宿亭主等は麻上下を着用して出迎え、御着船の祝辞を述べる。直ぐに宿へ案内し、幕で飾り、提灯を掛け、それぞれの宿の表へ宿札を掛ける。

上・御用意有之

伊能勘解由様御宿

坂部貞兵衛様御宿

右ハ両家之門ニ掛之

永井甚左衛門様

今泉又兵衛 様

御宿

門谷清次郎 様

右ハ入口ニ掛之、三名ニ而一枚ニ書越

右宿札三枚也、其余ハ札ニ不及

そして、明二十九日は天気次第で、海が坪であれば沿岸を、晴れで見渡しがいけば有明山へ、雨の時は市中測量との話し合いをする。

平戸藩士・牧山仁兵衛（対馬測量後上五島の平戸領迄廻る役目が残っていた。）の宿への挨拶に伺った後、この夜の星測の場所を扇佐兵衛方に決定し、大工に注文通りの大柱二本を建てさせる。早速、坂部は星測を行う。

明けて二十九日は曇天で坪であつたので沿海測量が始まる。

坪能候付、今日海辺測量有之、六半頃いづれも被罷出

頭漕船式艘

御船手一艘二式人乗

郷夫ハ六人乗

天幕張

御船印有之 薄縁毛せん敷

右ハ両手御役人乗船

小船十四艘

右ハ両手測量御用船、左之札建之

羅針船 梵天送り船二艘 先縄船

跡縄船 中取船 札取船

札取、御郡足輕・勤之

対馬測量船団の構成である。親船は二艘、御船手すなわち、対馬藩の水軍から一艘に二人あて、村の水夫は六人宛てが乗り込む。幕を張り、藩の御船印をつけ、薄縁毛氈を敷いた両手の測量隊の乗船である。

小船が一四艘作業船として付属し、羅針船 梵天送り船 先縄船 跡縄船 中取船 札取船という札を立てた。

船に役割ごとの看板を立てたという記録は管見では始めてである。

この名前からみると、沿岸測量はほとんど船で縄を張ったと思われる。跡縄船が持つ縄を、先縄船が引いて先に出る。途中のたるみは中取船が間に入って吊り上げる。縄が伸びきったら、札船が先縄船に近づいて距離を記した札を受け取り、その位置をキープする。

合図で跡縄船が縄を巻き取りながら近づいて、札船の位置から再び同じ作業を繰り返す。

こんな具合に海中測量は行われたのではない。船の役割からこのように推測でき、海中縄引きは、船四艘でおこなわれたことがわかる。札船の札つまり測量記録表への記入と取り集めは、郡足輕が勤めたというから、これも尤もである。

梵天は目標となる陸地に立て、ここに向かって海中の縄を引いたと思われる。もちろん、陸地の梵天同士の間が縄で測ればそうしたであろう。

羅針船は、観測をおこなう下役、内弟子を乗せて動き回って、これらの作業を指揮した指揮船だと思う。海中で引き縄の進路を変える場合にはその場所に出かけて屈折角を測定しなければならない。陸地に梵天を立てるときはその位置をきめてやらねばならない。立て終われば上陸して計測が必要である。引き縄作業が適当かどうかは絶えず確認が必要である。走り回るといった感じだったろう。

測量現場までは下役、内弟子は本船にいたと思うが、現場ではほとんど羅針船で指揮にあたるのか、縄引きの作業船に乗り込んで、人足を直接指図していたにちがいない。おそらく、本船で全体の様子をみていたのは忠敬と別手の責任者・坂部貞兵衛くらいだったろう。

(つづく)

連載

新・伊能忠敬物語 (二)

渡辺 一郎

佐原の伊能家当主として

ここで佐原へ婿入り後の活動を述べなければならぬところであるが、佐原時代については、本会顧問の小島一仁氏が、長年史料にもとづいて実証的な調査研究をされ、多くの成果を発表しておられる。

著書の三省堂選書『伊能忠敬』の初版は、いまから約二〇年前の一九七八年発行であるが、忠敬の佐原における業績に多くの頁をさいた最初の本であった。そしていま、小島氏は、「伊能古文書教室」と名付けて、伊能家史料をもとに、やさしい文章で事実にもとづいた所論を本誌に連載されている。

前掲の著書と伊能古文書教室の内容以上に忠敬の佐原における個々の業績を述べることは、誰がおやりになっても難しいことだと思う。したがって、はるかに後学である筆者はここをパスし、伊能家の事業活動について若干の数字をあげるにとどめたいと思う。

在町・佐原の発展と伊能家の土地経営

忠敬が事業家として活躍した舞台の佐原市は、現在は人口五万余。利根川下流の水田に囲まれた豊かな穀倉地帯に位置している。川越市

とともに関東における歴史的建造物保存地区に指定され、行政の援助もあつて、古い町並みが整えられ、歴史に名を残した名家も多い。

街の人々によると、むかし佐原は、千葉県下では銚子に継ぐ第二の都市であつて、千葉市などは当時はまだまったく市街化していなかったという。その在町佐原の発展と伊能家の事業経営などを、酒井右二氏の『近世中後期在町佐原における伊能家の経営動向』(千葉県の歴史35号)によつて概観する。

佐原は利根川の河川流通の河岸場として発展した町で、元禄期には家数八二四軒、人口四、〇一四人、寛政期には家数一、二六〇軒、人口五、三五九人を数える関東でも有数の在町であつたという。

佐原村の本田は村高一八一七石で、本、上、下、浜、中宿の五組に別れ、伊能家はその一つ本宿組(高三五〇石)の名主であつた。元文四年までは旗本の知行地であつたが、そのあと幕府領となり、安永七年からは再び旗本領となつて、幕末まで津田山城守が知行した。

いっぽう佐原村の新田一七七五石は、江戸期を通じて幕府領であつたが、この開発は近世初期から「根郷五ヶ村」と呼ばれる近隣村落の組合で行われた。伊能家はその中心的役割を果たしていたという。

佐原村と佐原村新田における伊能家の持ち高はつぎのように急激に変化している。

一七二〇(享保五)年	五二、八石
一七四三(寛保三)年	七三、八石
一七六八(明和五)年	八四、二石
一八〇〇(寛政一二)年	一四〇、石余
一八〇二(享和二)年	一四五、二石

ちなみに、享保五年の持ち高五二、八石のうち、本宿組内の持ち高は三三石余で、佐原新田が一七石となっている。忠敬の入夫は一七六二年で、隠居が一七九四年であるから、持ち高の急激な増加は、忠敬の活躍期に合致する。忠敬が新田開発に注力したことがわかる。

いっぽう、幕府政界の動きをみると、田沼意次が側用人となったのが一七六九年、老中就任が一七七二年であるから、田沼の重商主義的政策に乗って、商業的な水田開発が行われたと考えることもできる。商業資本をあつめ、利根川の公有水面を使つて干拓により水田を造成し、免租の利益を手に入れ、田地売却により資本回収をおこなつたのであろう。

手元にはどうぜん創業者の利益としての田地も残つた。このような集積で新田の所有地を増やしていったのではないか。

利根川沿いのあまり費用をかけない新田であれば、氾濫によつて冠水するのはどうぜんだった。忠敬が水防に努力したとか、氾濫後区画が分からなくなつた田地の、再整理にかかわつたという話はありうることだと思ふ。

新田開発以外でも、年貢米輸送など近隣の村々の米穀流通に関与したからその縁で、金融の担保、入質などに伴う土地集積も行われているが、一件二〇両あるいは三〇両ぐらゐの入質または売渡証文がみられる程度で数量的には大きなものではない。

伊能家の土地所有については、大地主というにはほど遠く、経営の主体はあくまで商業資本だったようである。

## 商家としての伊能家

土地を含む伊能家の経営全般を酒井氏の資料のほかに、佐久間達夫

氏の解説による『続・新説伊能忠敬』を参照しながら眺めてみよう。

伊能家に伝存した地図・文書類は大きく三つに分類することができ。最も主要な部分は、国指定重要文化財になっており、昭和三六年に佐原市の伊能忠敬記念館に寄贈されているが、そのほかに、伊能家所有のまま佐原市が保管している史料があり、佐原市・佐原市教委発行の『伊能忠敬関係歴史資料目録』に整理されている。

その他さらに、世田谷伊能家には史料が約六〇〇点ばかり残っており、なかには重要な歴史的意義を持つ史料も存在する。

本来は公的機関の専門職員が内容を吟味して、整理されねばならないのであるが、かつては専門家が配置されていなかったこともあって、資料の整理が曖昧で、重要史料が三グループに混在している。

二番目の史料群のなかに、伊能三郎衛門家の経営状況を示す店卸し帳が何冊が残っているので、これを中心に伊能三郎衛門家の経営を分析してみることとする。

一七三八（宝暦一〇）年、忠敬の入夫一年前の記録のなかに酒造の利益の記載がある。

酒造米	一、二七六石
酒代金	一、五六四両三分
粗利	二二一両
純益	八一両二分（不良債権二三九両二分差引後）

その他の収益については書いてないのでわからないが、これまでいわれてきた忠敬入夫のときは、伊能家が破産に瀕していたような記述は



間違っていることがわかる。

事業部門別の利益が記されている一七七四（安永三）年の店卸目録帳と、一七九三（寛政五）年の店卸目録帳を眺めてみよう。安永三年は忠敬二七歳、婿入りして一〇年を経過し、河岸一件の訴訟にも勝つて、伊能家における立場が確かなものとなっていたと考えてよいだろう。この年、義母のタミが死去している。

寛政五年は忠敬隠居の前年である。この年の棚卸は事業家・伊能忠敬の入夫後三二年間の業績評価のようなものと考えてよいだろう。

# 一七七四（安永三）年の店卸目録帳

酒造	一六三両三分
田徳	九五両
倉敷・店賃	三〇両
舟利	二三両二分
薪木	三七両三分
炭	一両一分
合計	三五一両一分

一七七四（安永三）年の店卸目録帳では、酒造の利益は一六三両三分で、忠敬入夫一年前と比較して増えていないことがわかる。田徳は小作料収入、倉敷・店賃は不動産収入で、舟利は川船運送業であろう。江戸に薪問屋を出した話が伝えられているが、江戸の町に薪を供給する商いが以外に大きいのに驚く。炭は始めたばかりかも知れないが事業部門として顔を出している。この表でみるかぎり伊能家は酒造家で、その他は付帯事業と考えるのが妥当と思われる。

# 一七九三（寛政五）年の店卸目録帳

酒造	三七〇両三分
田徳・店賃	一四二両一分
倉敷	三〇両
運送	三九両三分
利潤高	四五〇両一分
米利	二二一両一分
合計	一、二六四両二分

ところが、隠居前年の事業収支となると、内容が一変する。酒造が二倍以上になっているほか、倉敷は横ばいながら、小作収入と店賃も五〇%増しになり、運送業も二倍に近い伸びである。なかで最も注目すべきことは、安永三年にはなかった利潤高と米利の金額である。

利潤は貸付金の利息であり、いわば金融業収益である。これが最大の利益を上げている。米利は米穀の売買利益である。米の現物や先物で活発な取引が行われたことを推測させる。米売買の利益も酒造について大きい。

寛政一二年（第一次測量出発の年）の伊能家の財産状態については、伊能家の事績をしるした『金鏡類録』のなかの「佐原の村人が、幕府から忠敬に苗字帯刀を認めるよう箱訴した一件」の記録に出てくる。

江戸の勘定所の審問において、勘定奉行・柳生主膳正が「伊能家の財産はいかほどあるか」と訊ねたのに対し、村人は「そういう質問には答え難い」と応ずる。おおよそでよいからと押して質問したのに答えて、藤左衛門という村役人から「営業は米穀商と酒造が中心で、他

に地店賃を一〇〇軒余持つており、奉公人は店の使用人六・七人、下女五・六人のほか、酒造のときは米搗きを二・三〇人雇うから全部で五〇人くらいになるでしょう。家産は三万両ほどといわれています。土地は本田高百石、新田二町歩余り、作奉公人も五・六人頼んで手作りもしている」と答えている。

ここに出てくる三万両がひとり歩きして、隠居時の財産三万両といふ伝えられているが、それだけの身代は酒造や運送、店賃などでは不可能であり、金融業や米相場もやっていた筈と考えていたが、寛政六年の目録はそれを証明するものである。

『金鏡類録』は伊能家で作った資料なのだから、ここに掲載されていることは、それほど離れた数字ではなかったのだろう。

### 江戸へ出府、高橋至時に師事

#### 隠居し江戸へ出府

事業に成功した忠敬は四九才で隠居する。このとき息子・景敬は二八才だったから当時として早すぎることはない。このあとは、花鳥風月を友として優雅に暮らしてもよかった。実際に、忠敬には文学趣味があり、若いときには、その気持ちが強かった。

ところが、江戸に出て天文・暦学をこころざし、一九才も年下の幕府天文方・高橋至時（よしとき）に入門する。

このあたりは、戦前の修身の教科書で取り上げられ「若い師匠に辞を低くして入門し、熱心に勉強した」と説き、また、諸先生を歴訪して最も納得がいった至時に入門したとも伝えている。

しかし、本当のところは分からないことが多い。なぜ理系なのか、

どうして天文・暦学なのか、どこから高橋至時のことを知ったのか、などの疑問が残る。

小島一仁氏によると、とうじの佐原は商業の町として文化レベルが高く、四書五経くらい読めない者はお金があつても旦那とはいわれなかったという。また、富商たちには隠居したあとは江戸に出て、好きな道にすすむ風習があつたともいう。

これまで忠敬の江戸出府と勉強についてよくいわれてきたのは、「吾等幼年より高名出世を好み候えども親の命にて佐原に養子に云々」という遙かに後年の手紙（千葉県史料 近世編 伊能忠敬書状 取載）の一節である。少年時代から学問で身を立てたかったのだが、親の命で佐原に養子に入り、学問を中断して家業に精を出した。事業に成功し隠居したあとで、もともと好きだった学問の道に戻って、名を残すために勉強を再開したといわれてきた。

この手紙は、師匠・高橋至時の跡を継いだ景保の役宅が失火で焼失したという知らせを測量先の九州で受け取った忠敬が、娘の妙薫にあてて「だから、いわないことではない。景保はやり過ぎた。人の恨みを買わないよう控えめに控えめにと申し上げてきたのだが聞き入れず、こんなことになってしまった。それに引換え私は、やりたいことも我慢して云々」という話しの続きが前掲の文章である。

着実に実績を積み上げて今日に至った自分の人生と比較して、師匠の息子・景保の、才能にまかせた坊ちゃん振りを歎いた文であつて、死の五年前に書かれたものである。晩年には、人は自分の人生を粉飾する傾向が生ずる。遙か後年に、話の行き掛かりで書いた文章の一部を捉えて、終生の目標であつたかのごとくい立てるのは適当とは思われない。

天文・暦学を選んだ理由は、医者とか暦学者は結果がはっきりして

いて、家柄がよくても病気を直せない医者は価値がないし、日食や月食を当てられない暦学者は相手にされないの、在野の知的人生を求める多くの人々が選択したともいわれる。

しかし、確かな動機のひとつは、伊能の一門には凄い先輩がいたこ



とである。忠敬の四代前の伊能景利（最初の妻みちの祖父）は、隠居後、佐原村の古記録を集め、一五〇年前からの史料を「部冊帳」という記録集に編集した。最近、佐原市で解説し刊行されたが、B5版前巻一冊、後巻二冊の全三冊で、総頁数一、六四一頁の大冊である。また、同族の伊能茂左衛門家の伊能景豊は、またの名を楳取魚彦（かとり・なひこ）といい、隠居後出府して賀茂真淵門下の国学者として名を成している。

こういう先輩に囲まれた入り婿の主人として、負けないように何かをしなければ、という気持ちがあってもおかしくはない。忠敬は若い頃はどうかや文系志向だったが、理系にも関心があった。息子に依頼して京都から「古暦便覧」「授時暦俗解」などの暦書を取り寄せている。二人の先人は文系だったので、あえて理系を選んだのかもしれない。

理系なら和算から暦学・天文学に進むのは時の流れだった。ここで忠敬が高橋至時と巡り会ったのは第一の幸運である。もし、至時に巡り逢えなかったら後年に名を残すことはなかったろう。至時は大阪定番玉造組の同心であったが、天文・暦学を新しい暦学家・麻田剛立に学び、門下の俊才であった。寛政の改暦のために、同門の間重富とともに幕府から召し出され、旗本の天文方に抜擢された人物である。

### 寛政の改暦

ここでもよくいわれるのは、幕府は師匠の剛立を召し出したが、わけあって固辞したため、代わって至時と間重富が招請されたという説である。

麻田剛立は豊前杵築の藩医であったが脱藩して大阪に出て医を業としながら天文・暦学を研究していた。幸いに藩侯の理解を得て、追捕の恐れもなく、門人をとり研究に従事していた。したがって藩侯に恩

義があり、杵築侯以外に仕えることはできない、といつて至時と重富を幕府に推薦したという話である。

美談としてあたりが良く、語り継がれているが、麻田剛立の研究者で、大分県先哲史料館の学芸員鹿毛氏の調査では史料はないという。至時、重富に直接声がかつたのではないか、とのことである。美談、偉人伝の類は後年の尾ひれが多いから気をつけなければならない。忠敬については、近年は関心が高まっているので、今でも「尾ひれ」が作られている。

この当時おこなわれていたのは、宝暦暦という暦であつた。この頃の暦の作り方は、太陽と月の運行を長年にわたつて観測して、運動の経験則を見出し、将来を予測するものであつた。

求められた法則にしたがつて、日食、月食の発生日時を書いてあり、予報と発生がピッタリ一致することが暦の正確性を証明するものとされた。しかしながら、とうじ天体の運行が理論的に解明されたわけではなく、経験的な傾向値から予想するのであるから、観測データに近い部分では一致するが、時間とともにずれてくる。

日食・月食が起こると暦に書いてあつても、実際に起こらなかったという事態がすでに生じていた。幕府天文方は暦局あるいは司天台ともいう。天子という言葉があるが、これには、天の運行を管理する天帝の委嘱により地上で業務を司るというような意味がある。為政者は天の運行を把握していなければならないとされていた。

日月食が外れ、暦が信頼を失つたということは、為政者の能力が疑われているということでもあつた。幕府に司天台があり、実質的な編暦権が朝廷から幕府に移つていたとうじ、幕府の威信が問われていることでもあつた。

幕府天文方には、渋川、吉田、山路などの諸家があり、なかでも渋

川家の初代春海（はるみ）は編暦権を朝廷から幕府に移管させた功勞者であるが、代を重ねるにつれて活動が停滞し、暦法改正の能力がうしなわれていた。

洋学の実用性に注目して、蕃書の禁を緩和した八代將軍・徳川吉宗は、天文・暦学にも関心を持ち、改暦を企画して観測器などを揃えさせたが、病没により挫折した。

寛政の改革を主導した松平定信も諸弊の刷新を図るなかで改暦を企画した。世にいう寛政の改暦である。有能な暦学者を探したなかで、中国経由で流入した西洋の天文学を採り入れ、新風を起こしていた大阪の民間暦学者・麻田剛立一派が浮上する。

一門の代表として高橋至時と間重富が天文方に招請された。至時は大阪勤務の同心から旗本に抜擢されて、天文方を命じられ、蔵前の領暦御用屋敷内に高橋役所を開設した。

至時の天文方任命は、『続徳川実記』寛政七年十一月十四日の項に出てくる。

「大阪定番同心・高橋作左衛門至時天文方となり、祿一〇〇俵五人口賜い。別に官料五人口賜う」

とある。後年、伊能忠敬が東日本全体の地図を提出し、將軍・徳川家齊が上覧したときも『続徳川実記』では一行書かれていただけである。

至時の天文方任命は、「寛政の改暦」の実行宣言のようなイベントだったのだろう。

旗本であるから、とうぜん將軍に拝謁し任命を受けたろう。天文方は若年寄支配である。至時の直接の上司は堀田攝津守正敦ら若年寄であつた。老中首座は三河の吉田藩主・松平伊豆守信明である。



松平定信は、在職時は老中首座で、かつ將軍補佐役として、政務のすべてを決裁していたが、寛政五年、若い將軍の成長にともない辞任していた。しかし「辞任の後も、政務はこれまでの基本方針どおりおこなうこと、定信の江戸城内の詰所は溜の間という井伊家、保科家などが詰める最も格の高い場所に指定すること、老中評議にも必要に応じて出席するように」と將軍・家齊から直接指示を受けていた。いわば、前官礼遇の扱いであった。



松平定信／自画像

ついでながら、徳川十五代の老中のなかで、將軍補佐役として、將軍代行のような職についたのは、徳川家光の異母弟であった保科正之と松平定信の二人だけである。いずれも將軍家に非常に近い血縁であった。定信は血筋からいえば將軍になってもおかしくない立場にあった。

定信の在任は僅か七年余りであったが、強力な権限にもとづいて、多数の人材発掘をおこなった。伊能測量に縁が深い堀田攝津守、松平伊豆守（信明）、牧野備前守らを含むとうじの閣僚は、ほとんど定信の任用であった。

そして、従来の改革方針の継続が確認されており、諮問に応ぜよとの指示があつて、かつ直系の松平信明が老中首座を引き継いでいるのであるから、多少路線の変更があつたとしても、重要事項はすべて定信の耳に入り、定信の意向も反映されていたと考えてよいだろう。

寛政の改暦にともなう一連の処理は定信の方針にしたがつたものと考えられる。伊能測量についても、松平定信という大物が、堀田攝津守、高橋至時、伊能忠敬のラインをバックアップしていたと考ええると、納得できることが多い。それらは追々に述べたいとおもう。

### 三人目の妻お信の父・桑原隆朝

至時が内命を受けて江戸に出たのは寛政七年四月で、永田馬場山王脇の安部摂津守（武蔵・岡部城主）の上屋敷に奇遇したという（楓軒日録）。忠敬の出府は五月。伊能家の江戸店に近い深川黒江町（現在の門前仲町）の幸七店に隠宅を構える。間重富は六月に到着した。

忠敬の江戸居住は、至時の江戸入りと、ほとんど同時期である。なぜだろう。亡くなった忠敬の三人目の妻・お信の父・桑原隆朝は仙台藩の江戸詰めの上級藩医（四〇〇石）であるが、幕閣の一人、堀田攝



津守と強いつながりがあった。史料など具体的な証拠は見つかっていないが、前後の状況からみると、改暦の動き、高橋至時の起用などの情報を攝津守から事前に得ていた公算が大きい。

忠敬から隠居後の目標として、天文・暦学などへの関心を聞かされていた隆朝は、忠敬との間で

「ちかく改暦がおこなわれる。ついでには大阪から当代随一の先生が下ってくる。師匠を選ぶならこの人だ」

「もし希望ならば、堀田攝津守様にお口添えをお願いしてもよい」

「それは有り難い。ぜひお願いしたい」

というようなやりとりがあったのではないか。このあとの測量開始までの桑原隆朝の応援、測量開始後の忠敬への尋常でない肩入れは、このように考えると納得がゆく。

立場を変えてみても、改暦作業の準備を控えて、超多忙な至時に、暦学に関心があるというだけで、田舎から出てきた老人の弟子をとる気があったとは考えにくい。かつての偉人伝では、畳みに頭をこすりつけて一九才年下の師匠に懇願し、至時も忠敬の懇請をもだし難く入門が許されたと伝えるが、少し様子が違うのではないかとおもう。

堀田攝津守のお声がかりともなれば、受けるしかなかったのが至時の本音だったろう。

入門ができれば、あとは忠敬の独り舞台である。年若い師匠に対し、徹底して師弟の礼をとる。大金を投じて天文方に匹敵する観測機器を設備する。あきれるほどの熱心さで課題を勉強し、天体観測をおこない、推歩をする。また師匠に対し十分な経済援助もする。他人の飯を多く食べた青年時代や養子旦那としての生活の知恵、家業を再建した才覚などによって、至時の信用を確かなものとしてゆく。

前述の『楓軒日録』によれば、至時が將軍に拝謁のときの槍、大紋などの諸道具を整える費用は忠敬が提供したという。保柳睦美氏は『伊能忠敬の科学的業績』のなかで、至時の傍らには、同時にお召しを受けて出府した同門の富商・間重富がいた。新参の弟子の忠敬に頼むことはなかったらうという。

もちろん、間に話しても二つ返事でOKだったろう。しかし忠敬の方が話し易かったのではないか。勉強に熱心、（裏をかえせば、仕事は鬼ということ）かつ至れり尽くせりで自分を立ててくれる忠敬に、云いにくい相談をしたとしても、少しもおかしくはない。

### 忠敬の勉強

忠敬の勉強の様子について、これまで云われていることの根拠の一つに、後年、伊能測量に加わった師匠の次男・渋川景佑（第五次伊能測量に副隊長格で従った高橋善助が天文方・渋川家に養子に入って景佑と名乗った）撰の『伊能翁言行録（仮題）』（保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』に収載）に記した内容がある。これによると、

忠敬は高橋門下に入門して、中国の清の乾隆年間に編修された最高の西洋曆法書「曆象考成上下26巻、後編13巻、曆象考成表13巻」などを教示され、寝食を忘れて勉強し、これにしたがつて二、三年間の暦や、日月食の計算をおこなった。あまりにも根気がよいので、高橋至時がたわむれに忠敬のことを推歩先生と呼んだという。（当時は天体の位置計算のことを推歩といったので、天文計算専門屋さんくらしい意味だったろう）

いっぽう忠敬は至時や間の斡旋で、天文観測機械を発注していたが、機械が揃って観測の体制が出来上がると、外出を嫌い、観測所にこも

って熱心に作業した。

朝出かけると昼にはもどって太陽の南中を測り、午後出かければ、夕刻には戻って星を測った。曇天の日でないといつくり話しをするともなかった。暦局で先生と暦理を話合っていて、黄昏になると狼狽して取る物もとりにあえずに、大慌てで帰っていった。そのとき、脇差始め懷中物などを忘れるのはいつもの事であった。これを見て知らない人は性急な人だといったが、観測に熱心なあまりのことであった。しかし、何しろ熱心なので、日本ではじめて日中に金星の南中を観測した。

とある。また、東上野の源空寺にある忠敬の墓碑銘（保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』に収載）を書いた、忠敬の友人で、後年昌平黌学頭になった佐藤一斎は銘のなかに、

「君は星曆を好む。寛政六年に至り、家事を子の景敬に委ね、身ひとり江都に來たりて専ら曆学に従事す。当時伝えるところの曆法、君はその合わざるところあるを疑い、あまねく曆家についてこれを質す。なお未だ釈然とせず。すでにして官たまたま改曆の挙あり、高橋東岡なる者を召し、新たに浪速より来る。君は贊を執りて往きて見、始めて西洋曆法を聞く。理精しく教蜜にして、宿疑すなわち解く。遂に旧学を捨ててこれを学ぶ。推歩測量の精、東岡の門、独り君を推すといふ」と記している。

この二つの記録が忠敬の勉学の模様を伝えるすべてといつてよいだろう。言行録は勉学模様を述べるが、墓碑銘は入門経緯を記す。墓碑銘では諸家を歴訪したが納得がえられず、高橋至時にあつて疑問氷解

し入門した。忠敬は門下第一であるという。当然ではあるが、至時と忠敬を持ち上げた文章である。これまでの偉人伝はこれらの文章を脚色したものが多い。

渋川景佑（1787—1856）は至時の次男であつたが、文化二、三年にわたつて伊能測量に従事し、忠敬の身辺にあつた人物で、天文方・渋川家を継いでおり、忠敬を語るには相応しい者である。しかしながら、忠敬が金星を観測した1797年には景佑は一〇才であり、忠敬勉学模様を直接見聞できたかどうかは疑問がある。おそらくは伝聞であろう。

墓碑銘はすでに有名人になつていた忠敬の事績が公開の文章になつたはじまりである。ただ、一斎は忠敬のことをすべて承知していたわけではないから、伊能家および至時の跡を継いだ景保から資料の提供を受けた撰文であろう。

墓碑については、建設経緯、費用明細の資料が現在でも世田谷伊能家に残つていて、上司の景保がすべての経費を負担して建立したものである。（伊能忠敬研究一〇、一一号）景保には忠敬に対する深い思いがあつた。碑文も当然景保の意向が強く反映していると思う。つまり、碑文の内容は、忠敬の生涯についての整理された公式見解というべきものである。素晴らしい測量事績と対比して、キツカケについて深く詮索する気はなかつたかもしれない。

筆者は勉学の様子については、その後の測量の進め方などから充分納得できるが、入門の経緯について墓碑銘の記述は、周辺の状況証拠と考えあわせると、少し違うように思う。

最新の経・緯度標識見下ろし

# 忠敬の銅像「出発」



初の実測による日本全図を作製した伊能忠敬(1745—1818)の測量開始200周年を記念した銅像が、ゆかりの地である江東区の富岡八幡宮大鳥居わきに完成した。来年4月から導入される「世界測地系」に従った最初の三角点も新たに設けられた。近代日本地図の祖は、人工衛星を利用した最新のGPS(全地球測位システム)の経・緯度標識を見下ろすことになる。



## 富岡八幡宮 20日に除幕 全国の募金で建立

像は青銅製で高さ2.5メートル、右手には縮針盤のついた測量用のつえを持ち、右足を一步踏み出した姿。

55歳で北海道へ初めての測量旅行に出发する際のイメージだという。背面の黒御影石には忠敬が作製した日本地図が彫り込まれている。

伊能忠敬研究会や国土地理院を中心に結成した建立実行委員会が昨年3月から募金を始め、全国から約2000万円を集めて建立にこぎつけた。

忠敬は現在の江東区門前仲町1丁目付近に住み、測量旅行に出る際には近くの富岡八幡宮に参拝した。

像の製作者は彫刻家の酒井道久さん。忠敬の肖像画は下役の青木勝次郎が描いたものしか残っていないが、これは没後に描かれた晩年の姿。55歳ごろの忠敬に近づけるため、父方の子孫の写真も参考にしたいという。

監修にあたった直系の子孫で洋画家の伊能洋さんは「日本経済が最低の時期によくぞこれだけの人が募金に協力してくれた」と話していた。

除幕式は20日午前11時から。映画「伊能忠敬—子午線の夢—」で主演した加藤剛さんが測量隊にふんして記念ウオークもする。一般の人でも無料で参加できる(希望者は20日午前8時にJR東京駅丸の内中央口に集合)。

## 足元に「世界測地系」の第1号

朝日新聞東京版 2001年10月18日 発行部数120万部

そのほか日経、産経の全国版、読売の江東版、東京新聞・東京版で大きく報じられた。共同通信社がしっかりと流したので、地方紙で取り上げたところも多い。

## 新任ご挨拶

福田弘行

忠敬さんとの出会いは一九九〇年の「四千万歩の男」から始まる。

日経新聞のセミナーで渡辺代表と研究会の存在を知る。江戸博、佐原を経て伊能ウオークへと続いた。この十月で四二年半の会社勤務は賞味期限になる。(待つてました定年)記念で友人夫妻たちと三日間東松山を歩いた。歩くのは伊能ウオーク以外では初めてのこと。

伊能ウオークが始まった頃から、勤務先が趣町で飯田橋の研究会事務局が帰り道だったので顔を出したことから活動のお手伝いがはじまる。いままでは会社人間で世間知らず。すごいことをしている人に感心する。だが今度の事務局入りには迷う。会員にはその道の先達が多く、素人の世界とは違いそう。そこを超えるのもいいと割り切る。

伊能ウオークでは各地を八回訪ね、本部隊ステージ隊エリア隊の方々との交流が広がる。行く先々で郷土の偉人や旧跡にめぐり合う。秋田での菅江真澄、富山では石黒信由、三重から和歌山への熊野古道伝説、五島での坂部貞兵衛の墓守、萩の吉田松陰などとても鮮明だった。時代は伊能さんよりずっと後だが全国を歩いた旅の巨人・宮本常一の「歩く・見る・聞く」には大いに納得。広がる世界を感じとる。新宮市役所でみつけた。「天に星 野辺に花 熊野は人で語りたい」

ノンフィクションが好き。地図や日記に関心がある。先祖さまの關係で幕末の「尾蠅欧行漫録」から樺太の地図が知りたい。家では専業主婦に二男一女。一人は独立。パソコンの指導役を務める。佐原さんという先輩からふくたを読み込んだの歌をもらう。

「馥郁と香りて清し梅一枝 ただ人の世の糧となりぬる」  
会員各位の何分のご支援・協力をお願いいたします。(事務局長)

## 忠敬談話室だより

○札幌テレビからのお便りです。

先日はたいへん長いお時間を頂きありがとうございました。(一〇月一七日の伊能忠敬銅像完成記者発表当日に、渡辺代表が源空寺から発表会場まで長い時間付き合いました)多大なご協力をいただき、ご迷惑をおかけしましたことをお詫び致します。

さて、除幕式には日本テレビからカメラがお伺いしましたが、ものすごい賑わいでしたね。これも関心の高さの表れと実感しました。

今後、来年夏の放送を目指して、内容をつめて参りますので、どうぞ、これからもよろしくお願い申し上げます。

(札幌テレビ放送 遊佐真己子)

札幌テレビは地方局で、日本テレビ系列です。聞くところによると、系列局が全国ネットで流す番組を作る場合があるそうです。企画提案がとおって、伊能忠敬を一時間番組で作るようになりました。これほど大きな番組をやらせてもらうのは初めてです。とレポーター兼アシスタントは張り切っていました。

初心忘るべからず。新人の一生懸命な姿は好ましいので、雨のなかを長時間付き合いましたが、勉強が足りないには閉口しました。全国何処をとってもいい、ドキュメント番組なので、絶好のチャンスです。成功を祈るばかりです。  
(渡辺)

○武揚堂で製作中の地図帳『伊能中図』がいよいよ完成します。伊能中図を原寸のまま七四枚に分けて、A3版の地図帳としたもので、各図に渡辺のコメントがつけます。佐久間達夫氏が丹精した精密な測量ルート図をはじめ、各地の代表的伊能図の紹介、忠敬の人生や伊能測



量術の漫画紹介など、伊能図解説の決定版です。たぶん大谷亮吉の「伊能忠敬」とともに歴史に残る図書となるでしょう。

執筆は、全部会員で、渡辺一郎、清水靖夫、長岡正利、小島久武（武揚堂社長）の四氏です。監修は伊能忠敬研究会と日本国際地図学会。

研究会会員にはDMが送られますが、それを使って申し込む場合、特価は九九八〇円（予定）です。特価終了後は一三八〇〇円とのことです。御希望の方は特価でお申し込みください。

○伊能忠敬銅像建立報告書を鋭意作成中です。本報告書は『江戸の伊能忠敬』と題する豪華本で、募金に応じていただいた寄付者御芳名、銅像写真、銅像周辺の忠敬ゆかりの地、関係地図、除幕式模様、江戸における忠敬史料として江戸日記の解説文、伊能測量の全日程表（佐久間達夫氏制作）などを添付し、忠敬史料としても充分価値あるものとする予定です。

体裁は、A4版二百数十頁、ハードカバーとし、五〇〇部程度印刷して、募金に応じた各団体、全国の主要図書館に謹呈して永久保存をお願いします。

会員各位で、有料で入手希望があれば、会で費用を追加して印刷部数を増加することは可能です。値段は五・六千円ではないかと思えます。ご希望の方はお申し込みください。

なお、募金者全員には経過の概要、除幕式、寄付者御芳名と伊能測量の全日程表を添付した約一〇〇頁の一般報告書をお送りする予定です。伊能測量の全日程表はたいへん便利な史料です。御活用ください。

○アメリカ大図発見以来、各マスコミの注目が集まってまいりました。共同通信の強い要望で、前回調査で撮ってきたフィルムを洗いざらい

提供し、二回も追加公開して、多数の地方紙で取り上げられました。

三回目のときは、アメリカから貰ったサンプル四枚分の画像と、広島地区の無着色画像に伊能洋、浅井ふさ両氏に着色していただいたサンプルも公開しました。日経、産経で大きく報道されました。北海道新聞は一面中央のいい場所でした。

○日本テレビ系全国三一局ネット番組の「知ってるつもり？」で伊能忠敬を取り上げるようになりました。一月下旬から二月上旬に放映予定です。それでワシントンに大図を撮りにゆく話が進んでいます。

#### ○除幕式に加藤剛さん

除幕式が終わって会館で懇親会を開いているとき、仕事を終えた加藤剛さんが控え室に戻って来るのをお見かけしました。忠敬先生の扮装で階段を登って来られたのですが、いかにも疲労困憊といった態で控え室に入っていくのを見て、ああ剛さんもう六十数歳。いつもバリツとしてこやかにしているけれど、本当は大変なんだなあと感じ入りました。加藤忠敬先生、お疲れさまでした。

それにしても五五歳から七〇歳過ぎまで、全国を測量して廻った本物の忠敬先生は、そのご苦労いかに多かったでしょう。本当にお疲れさまでした。（編集委員 前田幸子さん）

○映画「伊能忠敬」がはじまりました。成功を祈るばかりです。初日直前に古賀社長から研究会と伊能さんにご挨拶がありました。「加藤さん、トーク番組に数多く出演して映画の宣伝をして、気の毒なくらいの努力です」と伊能陽子さん。加藤さんの真面目さは、現場でよく見ているが、大変なことだとおもう。

（渡辺）



## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこなたでも入会できます。  
二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

発表誌 年三回以上、交流誌 年三回以上

### ②例会・見学会の開催

### ③忠敬関連イベントの主催または共催

### ④その他付帯する事業

### 三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

## 投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁です。越える場合は分載または、間隔をおいて掲載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。原稿の状況はお問い合わせにお答えします。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイ

トルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは二つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。URLはつぎのとおりです。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/auto/inoh.html>

史料情報については、「伊能忠敬研究会資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。もちろん両者はリンクしています。

<http://www.city.fujisawa.ne.jp/~t.sakamo>

## 編集後記

○初めての編集では印刷原稿にするまで新しい出来事だらけでした。まだ、渡辺代表の負担軽減には至りません。これから腕を上げますのでどうぞよろしく。以前に比べてページ数で倍に、発行頻度も年四回になっておりますのでどしどし投稿をお待ちします。

○十一月二日の朝日新聞の声欄に「埼玉を歩こう小三の仲間と」の記事がのりました。伊能ウオークから始まった交流が東松山で再会になり、続きが四日の埼玉版の記事になっていました。会員の川上清さんの出来事です。三日間を毎日50歩歩いていました。

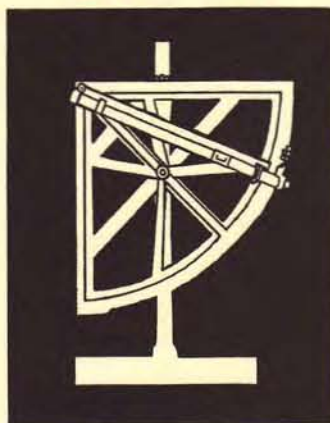
○富岡八幡宮に立派な忠敬銅像が完成しました。下町の風情と歴史探訪をかねて一度お出かけ下さい。また、昨年の劇場公演に続いて映画「伊能忠敬・子午線の夢」が全国公開されています。測量場面などロケが入り迫力があります。ぜひご覧いただければ。

(F)

# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No. 27 2001



### TOPICS

Main point and process of setting up INOH TADATAKA's Statue	Watanabe Ichiro	1
INOH TADATAKA's Statue was built at Tomioka-Hachimangu Shrine	Hukuda Hiroyuki	3
Report of 2001 study meeting and General meeting	Hukuda Hiroyuki	7
Abstract of Junko Suzuki's Speech at study meeting	Shirane Sadao	9
The LIST of donator for INOH TADATAKA's Statue	Editorial department	11
History of INOH TADATAKA's Statue	Inoh Hiroshi	12

### ESSEY

Born as a member of Ino family	Inoue Yasuko	14
--------------------------------	--------------	----

### MATERIALS

Study of "Map of Japan" compiled by Edo Government	Takagi Takayoshi	15
Reading Document in Sawara Katyo (2)	Kojima Kazuhito	22
INOH TADATAKA's stride	Saito Kuniharu	27
Process of apprentice Hakoda Ryosuke being adopted into Enomoto family	Suganami Hiroshi	29
Excavation of the route of INOH TADATAKA measured	Yokogawa Jun'ichiro	32
Tokuyama Survey and Incident of Hirayama's Hakama (2)	Ito Eiko	34
Three monuments in the place where INOH TADATAKA spent his young days	Kaiho Hideyuki	38
Completion of the monument "The place of the measurement by using rope on the sea"	Watanabe Kenzo	41
TADATAKA's two graves in the Genkuji temple	Nagano Tatsuyo	43
About setting-up of INOH Tadataka's bronze statue	Watanabe Ichiro	46
Document on INOH's Tsushima Land Survey (4)	Irie Masatoshi	49
New Edited Story OF INOH TADATAKA'S Life	Watanabe Ichiro	53
Address of new head secretary	Fukuda hiroyuki	62
MEETING ROOM	Editorial department	63

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY